



喜
多
隆
斗

憂
鬱

ア
ン
ド
ロ
イ
ド
の
ド

2122年夏のある夜。その時東京では雨が降っていた。

いつ止むとも無く降り続ける雨は街全体を濡らし、暗い夜にたれ込めた雲は、きらびやかな灯りを飲み込み、ぼんやりとして陰鬱な風景に変えていた。

同じ頃、焼け付くようなアリゾナの砂漠に何かが落下した。

すぐ近くには科学アカデミーのトレーニングセンターがあり、そこから一体の女性型アンドロイドが調査のために差し向けられた。

ブロンドのショートカットに不釣り合いな迷彩コンバットスーツ姿のアンドロイドは時速百キロで砂漠を駆け抜け、約一キロ遠方から目視確認とレーダー探査を行い、測定対象が安全である旨を報告した。落下物は無人の脱出ポッドであった。年代、形式から廃棄処分が決定した大規模発電衛星施設「コーン」の脱出ポッドと判明。「コーン」に生物反応はなかった。無線通信による反応も緊急性のものではなく、接触不良によるエラーが検出されていた。以上より重要度の高い調査ではなかった。

アンドロイドは試しに、普段は使用しない重力場センサーを使ってみた。それはこのアンドロイドにだけ特別に装備されたセンサーだ。センサーが右眼に装備されているため、アンドロイドの目の色は左右で違っていた。左が銀色の瞳であるのに対し、右は青い瞳をしていた。その用途はアンドロイド自身も知らない。もし戦闘中に使用するのならば、あまりにエネルギーを使用しすぎるし、全リソースを集中することから無防備極まりない。だから普段の戦闘訓練で使うことはない。今を置いて試してみる機会がなかった。

測定の結果、重力場に僅かな乱れが確認された。まず、センターに報告を入れ、その乱れの原因が何であるかを現場に直接赴いて確認することにした。

現場は静かであった。何も無い砂漠の真ん中に、ぽつりと脱出ポッドが転がっていた。ハッチが開いていたが、大型生物の反応は半径一キロ以内にはない。アンドロイドは警戒モードで脱出ポッドに近づいた。後方から攻撃を受けた時のことを想定し、視野は360度全方向に設定してある。脱出ポッドとの通信は何度も試したが、毎回同じ応答が返ってきた。憂慮すべき事項は今のところ見当たらない。

アンドロイドは携行を許可された対アンドロイド・E・ショックガンを構えて、開いたハッチの中を覗き込んだ。

何も無かった。人間が乗った形跡も、その他の何かが乗った形跡すらもなかった。

アンドロイドは警戒モードを解除し、何も発見できなかったことをセンターに報告した。

調査完了報告をして帰路に着こうとしたとき、何者かに呼ばれたような気がした。

気がしたというのはおかしい。アンドロイドにしてみれば、現象は起こったか、起こらなかったかしかない。しかし明らかに音声反応があったにもかかわらず、記録が残っていなかった。こんな不自然な現象は初めてだった。故障の可能性があるため、センターに戻ってからの精密チェックに必要と記録をしたところで、再び何者かが語りかけてきた。警戒モードに変更しようとした時、攻撃を受けた。

未知の衝撃がアンドロイドの胸を貫いた。

アンドロイドは後ろに一歩よろめいた。

アンドロイドは素早くその場から飛び退き、身を隠せるくぼみに飛び込んだ。

状況確認。

破損、故障なし。

周囲異常なし。

対象物変化なし。

ウイルス感染の兆候なし。

記録再生確認。画像、音声、無線信号に異常なし。

胸を触って見たが穴も焼け跡もない。

過去一分間のどの記録を探してみても、自らが一歩よろめく原因になるものは見つけれなかった。

何も変化はない。だが、よろめいた事実は記録されている。故障なのか。

アンドロイドは一つだけ変化があるものを見つけた。

胸ではなく、自身の顔に蒼い痣が出来ていた。重力センサーがある右目を覆い尽くすような青い、醜いあざ。もちろんアンドロイドに醜いという概念はない。

アンドロイドは痣の原因を探ろうとして手を触れた。途端に全てのプロセッサが一瞬真っ白にスパークし、命令が全て消えた。

約一分かかって、再起動と再設定が完了した。アンドロイドは立ち上がると真っ直ぐに脱出ポッドを見据えた。そして一度だけ訓練センターの方角に鋭い視線を向けると、あとは一度も振り返らずにトレーニングセンターとは逆向きの砂漠に向かって全速力で駆け出した。

全ての通信回路は意図的に遮断され、五分後にはトレーニングセンターは完全にアンドロイドの居場所を見失った。

アンドロイドはその日を境に消えた。

医療用ベッドにひとりの男が横たわっていた。短い頭髪にしわの刻まれた顔。しわは年齢のためではなく苦勞をしたためのようだ。筋肉質の身体に無骨な手。指には銀の結婚指輪。Y t o Jと刻まれている。今日覚めたところなのか、ゆっくりと開いた男の目はどこか、うつろというよりも憂いを帯びているように見える。男の名はジョー。たった今治療が終わり、現実世界の扉を開いたところだ。

ジョーは視界の空が完全に消えるのを待って、直ぐ脇に置いたマグカップに手を伸ばした。手に触れる感触がそれは現実だと教えてくれた。一旦手に取ってから、注がれたままの冷え切ってまずいコーヒーにうんざりしてそのままテーブルに戻した。

座位に変形したベッドから降りるとややふらついた。

「くそ。いつもこうだ」

悪態が口をついて出る。

「よう。ジョー。目が覚めたか」

ニヤニヤ笑いを顔全面に貼付けた大男が立っていた。主任看護師の男だ。名前は覚える気もないから知らない。警棒をこれ見よがしにぶらぶらと揺らしてるのが目障りだ。

「俺の荷物はどこだ」

「荷物なんてないだろ。こいつ以外はな」

男の脇をすり抜けて仔犬が嬉しそうに走り寄ってきた。

「俺の仕事道具があるだろ」

「ああ、これか。忘れていたよ。こんな代物で何をするんだ。大根でも切るのか？」

男は小馬鹿にした顔つきで、黒い鞘に収まった長い剣を放って寄越した。受け取ると懐かしい剣の重みが腕に伝わった。男の問いには答えなかった。そんな義理もない。

「お元気ですか」

仔犬がベッドの下から話しかけてきた。

「最悪だ。お前はどうかステップ」

「ぼちぼちです」

見た目は薄茶色のパグだが、実は超高性能のプロセッサを搭載した犬型アンドロイドで、ジョーの相棒であった。仕事の計算はステップがいなければ出来ない。アンドロイドと手を組むようにしてから、確実に仕事の精度が上がっている。

「ぼちぼちか。人間みたいな口をききやがる。少しは犬らしくしたらどうだ」

「私は犬ではありません。犬型のアンドロイドです」

「どっちだっていいさ」

ジョーはステップを抱き上げた。

するとステップが嬉しそうにジョーの無精髭だらけの頬をなめ回した。完全に犬じゃないかとジョーは思った。

ジョーは視界に退院手続き条項を表示し確認を始めた。全ては頭の中のチップ経由でネットワークから取り入れた脳内の画像だ。チップを経由すれば、どんな情報にもアクセスができる。

書類確認が済むと、退院時のクレジット情報を確認する。まただ。ジョーは舌打ちした。

「おい、俺のクレジットが減っているぞ。お前がやっていることは記録にも残ってる。返してもらおうぞ」

男はニヤニヤ笑いを更に大きくした。

「おいおい。それじゃあまるで、俺が退院する患者からクレジットをくすねているみたいじゃないか。俺はお前達が意識もうろうとしている時に、いつでも側で守ってやっているんだ。それくらいの謝礼があったて当然だろう？」

「半分だぞ。俺の財産の半分だ」

男はジョーの肩に馴れ馴れしく太い腕を回すと耳元で囁いた。

「ここだけの話、ここの施設には柄の悪い連中もいるって話だ。お前達が治療で無意識の間そういう連中と遭遇したくはないだろう。ここは俺に任せろよ。なあ、相棒」

男はそう言ってジョーの背中を叩くと勝ち誇ったように笑いながら立ち去った。

大きなガラス窓から陽光が差し込む大きなホール。高い天井と豪華なシャンデリア。そこにはいくつものベッドが置かれ、何人もの患者が寝かされている。殆どの患者は精神的な疾患を持ち、意識を中央コンピューターに接続した状態で治療をしている。開いた目は何も見ていないし、耳も柄の悪い看護師たちの言葉を捕らえることはない。中には面白半分に顔に落書きをされている者もいる。ついさっきまで自分もその一員であったと思うとぞっとする。

ジョーはため息をついた。

だが、ここに来ない選択はジョーにはない。仕事をした後には、ここ精神衛生センターに戻って来ざるを得ない状態になる。一人で生きていくことすら困難な状態。ここを出て、仕事をし、ここへ戻ってくる。それがジョーの生活の全てであった。ジョーは黙って着替えを済ませるとホールを後にした。

ジョーが施設を出て先ず向かったのは、オフィス「y u k i e」だった。ジョーに仕事の斡旋をしてくれる。言ってみればジョーの生命線でもある。だが、代表のユキエとの関係は微妙である。

「よう。久しぶりだな。仕事があるから呼び戻されたのか、それとも俺は治ったから出られたのか、どっちだ」

落ち着きのある色合いで整えた小さなオフィス。マホガニーの執務机の向こうで、書き物をしていた長い髪の女が顔を上げた。切れ長の目に整った顔立ち。ユキエである。何度見ても美しいと思う。だがその美しさこそが、ジョーを不安にさせる。美しさの影に本性が隠されてしまう。考えていることが読み取れない。しかも、肉体改造全盛の昨今、三十代にしか見えないこの女の年齢を知る術はない。ましてや心の奥底にあるだろう狡猾さを読み取る事はできない。ジョーの脳裏に過去の生活が蘇る。笑顔で待っていたユキエ。だがその笑顔が本物であったという自信はない。

「両方よ。今のあなたは調子良さそうにみえる」

ユキエがジョーの記録を視界の中で検索しているのがわかる。精神衛生センターの報告書を見ているのだろう。僅かに頷く。

「仕事をお願いしたいの」

「いつもみたいに陸奥からあぶれた残りカスカ」

「嫌みは止めて。私だって陸奥の仕事は取りたくない。でも津軽屋が実質廃業状態なのは私のせいじゃないわ。私が仕事を回さなければ、あなたは精神衛生センターに入ることもできない。どうやって暮らしていくつもりなの？」

悪徳看護師の顔が脳裏をよぎる。

「悪かったよ。どうもあそこに入るとスレちまってな」

ユキエが情報を転送してきた。驚いたことにエンジニアリングの場所はコーンだった。

「マジかよ」

「コーンが廃棄決定されたのはもう十年も前。未だに解体が進まないのはよからぬ噂があるからよ。コーンに幽霊がでるっていうね」

ジョーは向いの椅子に腰をかけた。ステップが膝の上に飛び乗る。

「それで」

「コーンの居住区をエンジニアリングして欲しいの。報酬はいつも通りにクレジットで。移動費はこちらが持つわ。どう？悪くない話でしょ」

「コーンね。俺は宇宙が苦手なんだ。泳げないんでね」

チケットが転送されてきた。コーンまでの輸送船離陸は一時間後だ。

「急がなくていいの？」

ユキエの目がいたずらに光る。ジョーは舌打ちした。ドアを潜るジョーにユキエが声

をかけた。

「もう一つ大事な用があったわ。あなたの未来が変わるかも」

「何だ」

ユキエは暫くジョーを値踏みするような目で見ていたが、

「あとで情報を送るわ」

とだけ言って書類に目を戻した。

一時間半後、ジョーは輸送船のデッキで、コーンへの到着を待っていた。窓から見るコーンの姿は、太陽光を受けてくっきりとコントラストが浮き上がり、濃淡で描く絵画のように美しかった。

実験用大規模太陽光発電基地。地上36,000キロメートルの、静止衛星軌道の上に建設されたマイクロ波送電式太陽光発電基地だ。太陽に向けられた発電パネルは直径2キロメートル。発電量は40テラワット。基地自体の形状は円柱形で長細く、所々に凹凸のある胴体がトウモロコシに似ていることからコーンと呼ばれている。

当時は東京の総電力使用量を賄う規模であったが、いまではとても間に合わない。今活躍しているのは、900テラワットの発電量を誇る、発電基地である、通称マッシュである。円形の発電パネルに小さくなった長細い胴体がキノコを連想させるためについたあだ名だ。そしてコーンはその役目を終え、宇宙を漂う鉄くずに成り下がってしまった。

「見た目は絵画のように美しい。だが、実際はポンコツだ。あんたこんなポンコツに何の用があるんだ」

ジョーは隣にいた男に話しかけた。

男は黙って頷いた。そして煙が空気に溶けるように消えていった。

ジョーは舌打ちした。

こめかみに鈍い痛み。あちこちから人の声が聞こえた。無線のチューニングが会っていない時のように、何を言っているのかは聞き取れない。緊張のせいで意識が拡散し始めていた。さっきの男の幻視もそのせいだろう。

ジョーを乗せた輸送船は発着ドックにゆっくりと近づいていった。近づくにつれて、まともに見えた外見もそうではないことに否応なく気づかされた。長年極寒の宇宙空間で太陽の熱にさらされ続けたコーンは、あちこちにひどい劣化が見られた。発着ドックには様々な破損部品が漂っていた。

ジョーはコーンのコンピューターに意識を5%の割合でリンクさせた。内部の情報を得るだけなら、その程度で十分だ。

コーンのメモリーから稼働状況を読み取る。見た目は廃墟のような有様だが、中身は

まだ十分に生きている。酸素も豊富だ。ジョーは黒いロングコートを羽織ると商売道具の剣を握った。マンホールほどの大きさの移動ボードが目の前にすっと進み出てくる。するとその真ん中にステップがちょこんと座り込んだ。

「よし行くか」

ジョーが乗るとボードが僅かに浮き上がり動き出した。行き先はコーンのコンピューターが指示してくれるだろう。

居住区に着くと同時にステップが唸り声を上げ始めた。ステップは重力場計算の能力が非常に高い。いわば鼻が利くのだ。ジョーもすでに感じ取っていた。居住区には何かがある。

居住区はコーンのほぼ中央に位置し、トウモロコシを輪切りにしたようなエリアに二百人が住めるようになっている。各部屋は全て外周部分に位置し、内側には会議室やレクリエーション施設が配置されている。中央シャフト回りは共有スペースになっていて、足下、いわば地球側には常に地球の映像が投影され、母なる大地を目に収められるようになっていた。電力だけはことかかないコーンでは今でも母なる地球が投影されている。

その地球の映像の上に立ったジョーは居住区を見上げた。居住区に遺された人々の思いが様々な映像となって目に飛び込んでくる。

肩を叩き合って笑う男たち。

愛を囁き合う男女。

憎しみを燃やす初老の男。

だが、どれも重力場を歪めるほどの感情ではない。

ステップが唸りを高める。計算が始まっている。どこの歪みが一番大きいのか。

「移動しよう」

ジョーたちはシャフトの内側をゆっくりと螺旋状に進んでいった。

次第に何か別の感情が感じられるようになった。同時にこめかみがズキズキと痛み始める。様々な囁きが渾然一体となって延髄を直撃する。首筋をなでる冷たい風。背筋から怖気が這い上がる。

「近いです」

ジョーにも感じられた。恐怖。移動ボードが一本の通路の前で停止した。明かりが灯っているのにひどく暗く、冷気が感じられる。フラッシュバックのように何かの映像が飛び込んでくる。怯えた男の顔。それはユキエに貰った資料にあった顔と同じだ。

男は科学アカデミーの元技術者だ。アンドロイドのコアプログラムと何か別の新型プ

プログラムとのインターフェースを設計していた。男は十年前に科学アカデミーを辞め、いくつかの職業を点々としたあと、コーンの解体作業を請け負う業者を通して、ここへやってきた。

しばらくは何事もなかった。ところがある日男は発狂した。そして五人の仲間を惨殺してから自殺した。

以来コーンには幽霊がでるといふ噂が立ち、いつしか解体業者も気味悪がって近づかなくなった。お陰で解体は進まず、新規に建設予定の宇宙ステーションへ部品を流用することもままならない状況になっていた。そこでジョーに除霊、つまりエンジニアリングの依頼がきたというわけだ。

ジョーは通路を進んだ。目指す部屋は通路の突き当たりだ。強烈な冷気がしみ出している。一体何が男を怯えさせ、凶行に走らせたのか。

「ステップ。同調周波数と周期を計算しろ」

「わかりました。ジョー」

ステップがうんうん唸り始める。ステップの力を借りなくてもエンジニアリング自体は可能だ。遙か太古から人類がやってきた方法がある。ただその方法は正確さを欠いた。霊とは何なのかを科学的に立証できていなかった。今でも完全に証明されてはいない。ただ、霊が出る場所にはMM場と呼ばれる特殊なエネルギー場が形成され、その強大なエネルギー故に重力場に歪みが生じる。ジョーたちエンジニアはその歪みを、拡散された意識の中で検知できる。そしてエネルギー場の周波数に意識を同調させることで、少しずつエネルギー場が持つ振動を中和することができるのである。

「計算終わったか。同調周波数は何だ」

「周波パターンは、申35、巳722の混成。般若心経が一番近いと思います。補正文言を適当に織り交ぜて下さい。ジョーならその場で補正できるはずです」

ステップは言ってぺたりと座り込んだ。舌を出して呼吸を整えている。疲れたのだろう。

「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時」

ジョーは手に数珠を右手に巻き、左手に持つ剣を正面に突き出した。そうすることで剣が全ての邪気を払ってくれるとでもいうように。そして般若心経を唱えながら通路を一步一步進んで行った。

通路の照明が明滅をしている。正面の金属扉には映像結界が張られている。こんな無意味な映像で結界が張れるなら、エンジニアはいらない。痛みはこめかみから頭全体へと広がりつつあった。

「照見五蘊皆空…」

意識が拡散し経が乱れる。扉の向こうから強い意志が流れ出し、ジョーの心に流れ込んでくる。その力は強く、押しとどめる事はできない。ジョーの心は意識の大気の中を、木の葉のように舞った。

それでもジョーは一步一步進み続けた。映像結界を通り過ぎ扉の前に立った時、その冷気にジョーは鳥肌がたったが、シャツは汗で背中にべったりと張り付いていた。

扉に触れると電気が流れたように身体が反応した。

「是諸法空想」

扉にリンクして一気に開ける。流れ出る冷気。部屋の中は真っ暗で静まり返っていた。

照明を点けると冷たい空気で白くなった息が、狭い部屋に広がった。

それはあまりに狭い部屋だった。白を基調としたベッドと机があるだけの部屋。踏みしめる大地のない宇宙で、たったこれだけの広さで暮らしていくのは、どのような気分なのかジョーには想像できなかった。

ステップが右手ベッドの直ぐ上の壁を指し示した。

「あそこが特異点です」

「無苦集滅道」

ジョーは剣を鞘から抜き放つと、目の前で真っ直ぐ掲げた。研ぎすまされた真っ直ぐな剣は京都の職人の手によるものであり、細かい文字で般若心経が刻印されている。その剣をジョーは一気に特異点に向かって振り下ろした。空気を切り裂く音がして空間が真っ二つに裂けた。

ぱっくりと開いた裂け目は、ゆっくり脈動するようにゆらゆら揺れ動き、卑猥な印象を与えた。

「我共来我従、破」

その裂け目の中心に、ジョーは剣を真っ直ぐ突き立てた。剣は深々と空間に突き刺さり、柄まで見えなくなった。

果たしてステップに同じ光景が見えているのかジョーには分からなかった。ステップだけではない。恐らくジョーが見ている光景は、ジョーにしか見えない。それはジョーがエンジニアだからである。ジョーは拡散した意識の中で、同調周波数に脳髓を揺さぶられ、本来見えないものが見えるようになっている。端から見れば、頭がおかしくなっているとしか見えないこの光景こそが、エンジニアに必要な力のひとつなのだ。

ジョーは柄から左手を離すと、切り裂かれた空間の縁を掴み、その隙間を広げていった。人ひとり通れるだけの広さまで広げると、ジョーは真っ暗で何も見えない、何も

ないどこかへと飛び込んだ。

その中は暖かった。いや寒いのかもかもしれない。感覚的に捕らえられるものは何も無い。そこは時間と空間が入れ替わり、行動を誤れば宇宙の彼方へ飛ばされてしまう世界。分子は凍り付き、何も生まれない。光はなくただ遺志だけが存在する。存在する遺志はその思いを伝える手段を持たない。だからジョーが遺志を汲んでやらなければならない。

「無色声香味触法無限界乃至無意識界我共来我従自意識明」

ジョーは周りに意識を集中した。空間の隔たりは未来と過去につながる。どこかにこのMM場の思いの元になる事象が刻まれているはずだ。だが、意識の拡散と集中は真逆の行為だ。集中すればMM場の遺志を受け取れなくなる。だが集中しなければどこに事象があるか見えない。そのぎりぎりの調整を何度も試みながら、MM場の本質を探り、ついに見つけた。

様々なイメージが現れては消え、そしてまた現れた。溢れる思いがジョーを包み込んだ。

「解った。お前は苦しんでいたんだな。一体なにがお前を苦しめている」

ビデオの早回しのように、いくつもの重なったイメージが回り出す。そして一つのイメージに集約されていった。

10年前科学アカデミーの一室で、このMM場の持ち主は見てはいけないものを見た。アテナスに接続された意識リンクユニット。ユニットの椅子に誰かが座っているが、顔がぼやけて見えない。そのイメージが何を示すのかジョーには解らない。あるのは驚愕、怒りそして恐怖。追いつめられていくMM場の持ち主。辿り着いた先がこの小さな白い部屋。だが、包囲網は着実に狭まっていた。最後は絶望。

「もう終わったんだ。苦しむ事はない。お前を追いつめたのは誰だ。そいつを見せてみる」

だが、事象のイメージはどんどんと光の粒子となって拡散していく。エンジニアはMM場に潜む持ち主の思いを聞いてやる。それが浄化につながる。MM場はすでに浄化の段階に入っているのだ。

やがてイメージは痕跡も残さずに消えてしまった。思いは遂げられたのだ。

疑問は持たない。ジョーの仕事はエンジニアリング、MM場の浄化だ。苦しみが消え、安らかな場にも戻ればそれでいい。あとはMM場自身が自然と収縮していく。

「無圭礙故無有恐怖

遠離一切転倒夢想

究境涅槃

三世諸仏

依般若波羅蜜多故」

ジョーはMM場が収縮して消滅するのを待った。ただ無心で待った。

ほどなくしてMM場は消え去り、ジョーの意識は自らの肉体に戻る筈だった。

だが、収縮したMM場の外に、もうひとつのMM場が残されていた。

「おい、なんだこりゃ。こいつは二重場だったのか？ステップ聞こえるか」

もちろん聞こえる筈が無い。ステップが捉えることができるのは、肉声だけである。

意識の言葉を捉えられるからこそジョーはエンジニアなのだ。

ジョーはまずいと思った。MM場の中心は遺志の重みでできている。だが、消えた遺志の重みが分からなければ、のこった遺志の重みがわからない。ステップは中で何が起きているかを知らないから、再計算もできないし特異点もわからない。つまり出口がどこに移動してしまったか分からないから出る事ができないのだ。

ジョーの意識は拡散し続けている。このままではこのMM場に閉じ込められたまま、永遠の時をすごすことになる。やがて意識は無限大まで拡散し、ジョーという意識はなくなってしまおうだろう。

「ステップ。助けてくれ」

ジョーは必死に辺りを窺った。何か遺志の特徴があれば、今までの経験からパターンを見つけ出せるかもしれない。だが、意識は拡散するばかりで集中することすら困難になってきた。あらゆる情報が入り乱れ、どこまでが自分なのかもわからない。もうだめだと思った。だが恐怖を感じるほどの意識も残っていなかった。

唐突に目の前で暗闇が裂け、眩い一筋の光がジョーの顔を照らした。何かと認識する事もなく、ジョーは光に飛び込んだ。暗闇から眩しい世界に出た。ぼやけていた視界が徐々にひとつになると、目の前にステップがいて心配そうにジョーを覗き込んでいた。

「大丈夫ですか」

猛烈に目眩感があったが、自分の世界に戻って来られたということだけは分かった。

「ああ、最高だ。ステップ。お前が引き上げてくれたのか？」

「はい。時間があまりにかかるのでおかしいと思いました。中でなにが起きているかは分かりませんでした。トラブルが起きたらうことは予想できました。だから、もう一度再計算をして特異点を探したのです」

「本当に助かったぜ」

ジョーはステップの頭をなでてやった。いつもなら喜ぶステップが神妙な顔をした。

「ジョー。ちょっと奇妙なことに気がつきました」

「ああ、俺も気がついたぜ。こいつは二重MM場だった。お陰で消えちまうところだった」

「その二重の外側ですが、以前に落とした事があるMM場です」

そんな筈はない。MM場というのは性格と同じで、まったく一緒などということはありません。全てのMM場は必ず個性を持っているのだ。それを見極めて落とすのがエンジニアの仕事だ。たとえ落としきれずに残ったとしても、それはそれで前とは別のMM場に変化しているはずだ。そしてMM場は死んだ人間が残すものだ。

「どういうことだ。双子かなにかか？」

「いいえ。たぶん全く同じです。だから出口を見つけてジョーを引き上げることができたのです。これはたぶんクロダ木星調査隊長のものです」

「なんだって？」

ジョーは意識リンクからネット接続をして科学アカデミーニュースを探した。

すぐに科学アカデミー長官であるクロダのニュースが飛び込んできた。クロダ科学アカデミー長官は今年の科学アカデミー予算からこども科学教室の開設を推進すると発表している。もちろんライブ映像だ。

クロダ科学アカデミー長官はたった今科学アカデミーで記者発表をしている。IDで本人であることは証明できるため、誰一人疑うものはいないだろう。だが、いま演説しているクロダ科学アカデミー長官の正体をジョーは知っていた。そしてそのクロダ科学アカデミー長官のMM場をジョーは十年前に木星事故で扱っている。問題はそのMM場と同じMM場を今日また扱ったということ。元クロダ木星調査隊長は間違いなく木星で死んでいるはずなのに。表向きの発表は元クロダ木星調査隊長は奇跡の生還をとげ、休養の末その人望を推されて科学アカデミー長官に就いたことになっている。科学アカデミーからは木星事故のことは決して口にしないよう約束させられていた。

ジョーは複雑な気持でニュース映像を眺めた。

「とにかく、こいつを落としてしまおう。あの時はいろいろあってやりきれなかった。いい機会だぜ。あの世に送ってやる」

「ダメです。ジョー。MM場が移動しました」

ステップがフロアを駆け回る。MM場の痕跡を探しているのだ。

「なんでMM場が動くんだ」

「強力な遺志があるのかもしれませんが。ダメです見失いました」

「くそっ」

ジョーたちがMM場を見失ったころ、一台の無人脱出ポッドがコーンを飛び出した。

その脱出ポッドは何かには操られるようにして、北米大陸を目指して降下していった。

二 凍てつく山

シベリアには殆ど人の踏み入らない地域が沢山あった。だが、いまでは名もなき山にすら山荘が建つ。それでも隣人を尋ねるには飛行機で何分か飛ばなければならない。少なくとも、隣人のパーティーがうるさくて眠れないようなことはない。

そんな山荘の一軒に一機の垂直離陸型の小型輸送機が向かっていた。その輸送機はステルスモードで飛んでいる。それを捉えているのは科学アカデミーのレーダーくらいなものだろう。

輸送機は別荘のある真っ白な山に近づくと、徐々にスピードを落としていった。音は殆どしない。僅かな気流の乱れはあるものの、気づかれる心配はない。山で気流が乱れることはしばしばあるものだ。

輸送機は別荘がかろうじて肉眼で確認できるところまで近づいて停止した。

「コード201」

「ラジャー」

ずんぐりした機体の横が大きく口を開け、一人の身体のかな男が雪の斜面に飛び降りた。

男は雪面ぎりぎりの所でアーマースーツの逆噴射で雪を巻き上げながら停止した。それからゆっくりと別荘に向かって飛行を開始した。輸送機は尾行でもするように静かにアーマースーツ男について行った。

「あいつ、なんでアムロイドに乗って行かなかったの？」

ユウがコントロールテーブルにどっかと脚を乗せて尋ねた。脚をコントロールテーブルに乗せるのには訳があった。小柄なユウはその身体の小ささゆえに見下されるのが堪らないのだ。どんな大男が相手だろうと、対等に渡りあってやる。そうした鼻っ柱の強さの現れだった。

アムロイドは通常のアンドロイドを戦闘用に改良したものだ。意識だけをリンクすることで、遠隔から自在に操ることが出来るし、攻撃を受けても人間が被害を受けることがない。

「ちょろい仕事だからさ。アムロイドを使ったら綺麗な別荘を壊しちまう」

飛行しながらベンケイが答える。

「あいつは改造した肉体を自慢したいだけだ」

そう言ったのはギンジである。この隊のリーダーだ。銀色の髪の間から覗く目が冷たい光を放っている。その名から連想させられる通り、ギンジは冷徹な男であった。そしてその瘦身は誰よりも素早く、正確に動く。ギンジに狙われて助かるのは簡単なことで

はない。

「それより、怪しい動きはないか？」

「ないわ。オールクリーン。全て情報通り。でもなんでわざわざ老いぼれの科学者を始末しなきゃいけないのよ」

「質問はなしだ。お前はただ言われたことをすればいい」

「お前じゃないわ。陸奥14代目よ」

ユウはふんと鼻をならした。首で水晶の数珠がじゃらりと音をたてた。

ギンジとユウはベンケイに5%意識をリンクする。ベンケイの視界が頭の中で再現される。

「もう玄関だ。ノックしたほうがいいかな」

「冗談を言っていないで、さっさと入れ」

ベンケイが内部検索を行う。ターゲットはまだベッドの中だ。腕に装着されたガトリングガンの安全装置を外す。同時に山荘のセキュリティに侵入し、情報をかく乱する。

「ベンケイ。メイドのアンディたちはどこにいるの？」

「遁走したよ」

「遁走？」

ユウは言葉の意味を掴みかね、自分で周辺検索してみた。驚いたことにメイドのアンドロイドはそれぞれ山荘から三方向に逃げ出していた。それぞれにアクセスを試みても、無意味な返答が帰ってくるだけだ。故障したにせよ、三体一緒というのは解せない。

「気をつけたほうがいいわ」

「生体反応はターゲットだけ。アンディたちもいない。何を警戒するってんだ」

ベンケイは玄関扉をそっと開けて中に侵入した。地図に従ってベッドルームに向かう。センサーには怪しい反応はなにもない。オーディオにマジッククッカー。そして冷蔵庫。こんな氷の山の上で冷蔵庫とは恐れ入った。ベンケイは吹き出しそうになるのをこらえながら前に進んだ。サーバーの履歴確認。情報操作の形跡もなし。安全そのもの。履歴によれば、メイドのアンドロイドたちは大量の無意味な情報を流し込まれて誤動作をしたらしい。誰が何のために？

目指す扉が見えてきた。一応内部を赤外線サーチする。ベッドの真ん中に人が横たわっていた。規則正しい寝息も聞こえた。ベンケイはドアノブを握りしめた。

ユウは何かおかしいと感じた。アンドロイドが三体一度に故障？だが意味があるのか分からない。ただ、さっきから首筋がぴりぴりと痛む。何かがおかしい。ベンケイに警告を入れようとして、ギンジに止められた。

「侵入するぞ」

ベンケイは扉を押し開けた。

その光景にベンケイは一瞬息が止まった。

今まで綺麗に生体反応を描いていたグラフが、全て一瞬で消えてしまった。ベンケイがドアを開けた瞬間に死亡したとでもいうように。

そしてベッドの上の科学者は明らかに死んでいた。顔のあった部分に大きな穴が空いており、ベッドは血を吸って真っ赤に染まっていた。

「おい、なんだこりゃ。さっきまで寝息を立てていたんだぞ」

一人の女がカーテンの後ろから現れた。均整のとれた身体にピッタリとしたカーキ色のコンバットスーツ。短めで金色に輝く髪。そして美しく整った顔と右眼を覆う醜い痣。一番の特徴は左右違う瞳の色だ。左の瞳が銀色であるのに対して、右の瞳は怪しく青色に輝いていた。

「誰だ」

ベンケイが素早く反応してガトリングガンを向ける。ところが女の動作は素早かった。アーマースーツのアクチュエーターが全くついていかない。ガトリングガンの弾があらゆる物を粉碎していくが、その追撃を逃れながら、女は窓を突き破って外へ飛び出した。

「ちくしょう。逃がした。追うか？」

切羽詰まった声が答えた。

「ベンケイ逃げて」

ベンケイは素早く反応し出口に向かって駆け出した。

同時に山荘が轟音を上げて爆発した。

「くそったれ。何が起きた。ベンケイ。返事をしろ」

「まずい。退避して」

ギンジも危険に気がつきすぐに上昇指示をだした。

エンジンが唸りを上げた瞬間、輸送機は巨大な掌に叩かれたように、斜面に叩き付けられた。爆発で雪崩が発生し、輸送機は雪崩に巻き込まれてしまった。

地と天が何度も入れ替わり、体中をぶつけた。それでも雪崩が収まったとき、二人はたいした怪我もなく無事と言ってよかった。だが、逆さまに雪に埋もれた輸送機はもう使い物にならなかった。

ベンケイの意識リンクをたどってみる。だが、もう何の痕跡も見当たらなかった。いくらアーマースーツを着ていたところで、あれだけの爆発で無事とは思えなかった。

ユウは唐突に三体のアンドロイドのことで、ひとつの事実気がついた。それぞれの

位置は、山荘を中心に正三角形を描いていた。もしかしたら、仕組まれた罠だったのではないか。いや間違いはないだろう。偶然三体のアンドロイドが故障して、三角形を描きながら遁走するなどあるはずがない。誰が一体なんのためにこんな罠を仕掛けたのか。

そもそも今日の作戦を知っているのは、自分たち以外にあいつだけだ。一瞬売られたのかとも思ったが、それはあり得ないだろう。自分たちが、自分がいなければ彼は生き残ることはできないのだから。

ユウたちは緊急脱出ハッチから外へ這い出た。空は憎らしいほどに青く澄み切っていた。山頂にあったはずの山荘は影も形もなく、雪崩の跡が爆発の壮絶さを物語っていた。真上にいたらこちらもひとたまりもなかっただろう。

「ベンケイ」

ユウは叫んでみた。ただ冷たい風が雪を巻き上げるばかりであった。

ユウは部屋に入るなり舌打ちした。いつも思う。この無駄に広い部屋は何のためなのか。999階の360度展望が望める部屋にあるのは執務デスクと洋酒のキャビネットだけ。単に権力を振りかざすだけのための演出装置にしか見えない。だいたい扉を潜ってからデスクまで50歩は歩かねばならない。ばかばかしい。

「災難だったな。ユウ」

「災難だって？冗談じゃない。こっちは死にかけた」

クロダ科学アカデミー長官は大きく両手を広げ、いつものように自分の寛容さを示そうとした。だが、相手がユウということを出して、すぐに下ろした。だが理知的な目と活力あふれる笑顔はそのままだ。起きているあいだこの顔は変わらない。

「どういうことなんだ」

「ログ見ろよ」

「私は忙しい」

狸親父めと思いながら、ユウは報告用にまとめた行動履歴をクロダの意識リンクに転送した。

「情報が漏れていたと？」

「ほかに考えられるってえの？」

「今回の作戦を知っているのは、私とお前たち。そしてアテナスだけだ」

「じゃあ、裏切ったのはぽんこつ機械ね」

クロダの眉が釣り上がった。

アテナスは科学アカデミーが総力を挙げて開発した政府アシストコンピューターの俗称だ。知恵の女神アテネから名前を取った、6連のコンピューター群だ。といってもハ

ードウェアが6つある訳ではなく、それぞれ独立したプログラムがお互いをサポートをしあっている。主な業務は登録された国民の行動監視と記録だ。今や全国民は意識リンクでアテナスにつながっており、行動履歴を記録されている。この行動履歴自体が個人IDになっている。アテナスは国内にあるあらゆる機器と動的につながっている。あらゆる機械には通信機能があり、それが全てアテナスを通して情報のやりとりを行うのだが、アテナスは自分の分身となる高度なマイクロプログラムをチップにコピーする。コピーされたチップはアテナスの小さな分身として一つの機能を受け持つが、これを連鎖的に行うために、今や全ての機械がアテナスという一つのコンピューターと言ってよかった。個々のチップは生物の細胞のような役目を持ち、全体をもってひとつの構成となる。個々のチップに決定権はなく、それでも全体が群れとして動作を行う。つまり、中核を持たせないことで高速な業務を実現しているのである。それでも高度な意思決定や連携方法を全体に伝える必要性はあるため、アテナスはネットワーク内に仮想のアテナス像を持ち、仮想アテナスが意思決定の全てを司る。つまりアテナスとはバーチャルなコアを6つ持ち、常にハード的な増殖を続け、巨大化していくネットワークそのものということになる。

行動記録を全て監視しているアテナスだから、ユウたちの行動も当然知っている。知っているがその意味を理解するかどうかは別の話だし、科学アカデミー長官の封印がされた行動は、アテナスといえども簡単に審査に回せない。

そして3体のアンドロイドたちの行動記録を確認したところ、アンドロイドに多量のデータを送っていたのはアンドロイドたち自身だった。それぞれが循環するような形で、相手のアンドロイドにチャイニーズキャラクターの連続データを送っていたのだ。これは何を意味するのか。アンドロイドたちが誤動作するようなデータを、始めから持っていたという事になる。もちろん製造段階でそのようなデータを入れこむ企業はないし、あったとしても履歴ですぐに分かる話だ。

だとすればアテナスほどのコンピューターに偽情報を掴ませるのは、よほど大規模な陰謀を企てている人物がいるということになる。それほどのことができるのは、たとえば科学アカデミー長官。

「私を疑っているのかね」

クロダがユウの目を覗き込む。

ユウがその目の睨み返した。

「疑っているわ。でも、それが得策ではないことくらい知っている。だってあたしが死んであんたが得をするとは思えない」

クロダが含みのある笑みを向ける。一般大衆の前では決して見せない笑顔。

「殺せるものなら殺したい。それが本音だ」

「じゃあ誰？」

「知らん。私か、お前を恨んでいる誰かだろう」

「心当たりがありすぎるわね」

そこまで言ってユウは言葉を濁した。確か一人いるはずだ。そして気がついた。大量のデータとは何なのか。チャイニーズキャラクターの連続データ。経である。それぞれのアンドロイドは大量のデータによって誤動作を起こしたのではない。大量のデータ自身が特殊な位置関係を示したときに力を発したのだ。アンドロイドはただのデータ運び屋にすぎず、落とした物を拾ってこいとでも位置を指示されただけだろう。ユウたちは誰かが配置した結界に入り込んでしまったのだ。そして結界には別の力が封印されていた。結界が崩れた瞬間に力が放出し爆発が起こった。こんな離れ業ができる人間は一人しか知らない。しかもそいつは自分に恨みを持っている。

「ジョー」

ユウの目に怒りの炎が燃え上がった。借りは必ず返す。

ユウが出ていくと同時に秘匿通信でクロダに通信が入った。クエーカーの山荘調査報告であった。

「MM場？誰の？」

クロダは報告にじっと耳を傾けた。聞き終わると顎の前で両手を組み目を瞑った。厄介なことになったと思った。ユウにやらせるか。いや止めておこう。間違いが起きればこの私もただでは済まない。ここは暫く流れに身を委ねよう。いずれここにも顔を見せるだろう。その時にユウに対処させるのが一番安全だ。少し情報をリークすれば彼らが囷らずとも弾よけになってくれるかもしれない。クロダは含みのある笑みを浮かべると調査隊に連絡を入れた。

いくつものまばゆい光に照らされたネオ東京国際空港。そこからほど近くそして暗いコンテナターミナルの一角に数人の若者がたむろしていた。若者たちは一様に同じ黒のレザージャケットを身につけており、背には深紅のコブラが描かれていた。レッドコブラの一団だ。彼らの側には傷ひとつない真っ赤なホバーライダーが、遠くの光を反射して輝いていた。ホバーライダーは低空を飛行する一人乗りの乗り物である。機動性に富みそして扱いにくい。自動運転もできるが、彼らはそんなやばなことはしない。何物にも束縛されないことが彼らのルールだからだ。

今夜も彼らは飛行ルートを相談していた。どこを飛ぶか。何で気分を盛り上げるか。どんな奴をカモにして遊ぶか。女？それも悪くない。以前、捕まえた女の手を左右からロープで引っ張りながら、街の上を飛んだことがあった。女に薬を与え、ラリっているとところを真ん中から突き上げてやった。女は底知れぬ快感と、いつ落ちるかもしれないという恐怖とで気も狂わんばかりだった。もしかしたら本当に狂ってしまったかもしれないが、隅田川に落下してしまった女に感想を聞くことはできない。

「ヒロシ。ワイルドキャッツにしようぜ」

今時の薬はネットから手に入れるドラッグアプリだ。頭の中の改造チップに流し込めばどんな快感だって創り出せる。ワイルドキャッツは山猫の神経系感覚を擬似体験できる。尚且つ仲間との集合意識を作り上げることができ、それぞれの感覚を重ね合わせて増幅できるため快感が何倍にも膨れ上がる。今巷で一番売れ筋の増幅系ドラッグアプリだ。

「あ？ああ。俺は後でいい。気分が乗らねえ」

レッドコブラのリーダーはヒロシといった。この界隈の暴走族でヒロシを知らない者はいない。ヒロシは東京みなとブリッジ橋脚のてっぺんから、エンジンを切ったホバーライダーで水面ギリギリまで落下する度胸試しのチャンピオンであり、敵対する暴走族たちのまとめ役でもあった。ホバーライダーの操縦が滅法上手く、東京の街を飛ばせて彼の右に出る者はいない。

だが、ヒロシはいつもどこか煮え切らない気持ちを抱えていた。全てが思い通りになる。だがその実なに一つ思い通りになってなどいないのではないかという感覚。ありとあらゆるものが幻であって、本当の自分は完全意識の見ている夢ではないか。今や現実と非現実を区別するのは難しい。そんな自分に対する自信の揺らぎがヒロシを時に憂鬱にさせた。

「ヒロシ。何だよ今日はつれねえな。いいからやれよ。そうすりゃあ、気分が……」

仲間の一人がヒロシの肩を掴んで振り向かせた。そしてヒロシの表情に気が付き凍りついたように言葉を飲み込んだ。ヒロシの機嫌を損ねて再起不能になった人間は数しれない。

「俺に命令するんじゃない。気分が乗らねえと言ったら乗らねえんだ」

「わ、分かった。悪かった。許してくれ」

ヒロシは苛立ちを隠すようにビールを呷った。このままでいいのか？内なる声が囁く。これが本当におまえの望んだ未来なのか？毎日意味の無いことを繰り返し、ただ動物のようにその場その場を生きることが望みなのか？ヒロシはテーブルを力任せに叩いた。一瞬にして全てが停止する。誰もが息を潜めてヒロシと視線を合わせないように下を向いている。ヒロシは時間まで止まってしまったような倉庫を後にした。岸壁で海風に当たりながらタバコを吸った。少しも旨く感じなかった。

そんなヒロシたちを見詰める一対の目があつた。一つは輝く銀色。もう一つは吸い込まれそうな青色。それぞれ色の違う瞳の持ち主は、静かに東京湾の海の中から若者達の動きを観察していたが、やがて静かに水の中に消えていった。

ヒロシは吸いかけの煙草を海に向かって指で弾き飛ばした。吸い殻は赤い軌跡を描きながら真っ黒な海に落ちていった。ところが火が黒い海に消える瞬間、何かが水面で吸い殻を弾き飛ばした。真っ黒い海から何かが飛び上がり、岸壁に取り付いたと同時に高々と飛び上がりヒロシの頭上を飛び越して埠頭に着地した。ネオ東京国際空港の灯りが濡れてつややかな曲線をわずかに浮かび上がらせている。やがてそれが立ち上がった。そこにはコンバットスーツに身を包んだ女が立っていた。

驚きの声に集まってきた仲間たちはそこに立つのがなめらかな曲線美を持った女だと分かった、にわかに色めき立った。

「よう、子猫ちゃん。迷子かい。俺たちに相談してみちゃどうだい」

下衆な笑いが広がる。

女はしばらく辺りを見回していたが、自分の出で立ちと周りとの差を感じたのかコンバットスーツを脱ぎ捨て全裸になった。

それを見ていた男たちが歓声をあげた。

そんな若者たちをかき分けて白いレザーのつなぎを着た一人が歩み出た。シルバーコブラの紅一点ユウコである。男達が色めき立つのが許せないのだ。

「ちょっと、あんた何者。しかも素っ裸で。誘っているつもり？」

「ひょう。女レスリングだ。何分でケリがつくか賭ける奴はいるか」

口笛が吹き鳴らされる。

ユウコは近づきながら腰から指向性スタンガンを取り出すとスイッチを入れた。女は

動かない。そして数メートルの距離まで近づいたとき、僅かな灯りが映し出した相手の顔に驚いて足を止めた。女の顔の一部は青い痣に覆われていた。

ユウコが足を止めた瞬間女が動いた。女は素早くユウコを回り込み背後から首に腕を回して締め上げた。一瞬の出来事だった。ユウコがやみくもに腕を振り回し、スタンガンが何度も青い火花を上げたが、がっしりと組み付いた腕は容易に離れない。そして空いた手がユウコのつなぎのファスナーを下ろし始めた。ユウコの白い胸が露わになった途端、誰も想像しなかった展開に周りの男たちが再び色めき立った。ヒロシしか知らないユウコの肢体。その全てがさらけ出されようとしていた。

「好い加減にしろ」

ヒロシの一言で空気が変わった。男たちの目に危険な色が帯び始めた。

ヒロシが電磁ナイフを取り出した。ヒロシは電磁ナイフの扱いに飛び抜けていた。だが女はうまいようにユウコを盾に使い、思うように近づけなかった。残りの若者たちが目配せをすると、一斉に二人の女に飛びかかった。

女はユウコからつなぎを剥ぎ取ると、下着一枚のユウコを男たちに向かって突き飛ばした。何人かがそれで動きを封じられた。残った男たちの電磁ナイフ攻撃を、まるでステップでも踏むようにやすやすとかわしながら、女はつなぎを着始めた。そして何歩かのステップを華麗に決めた後、頭上高く跳ね上がり、ブーツを履きながらヒロシの眼前に着地した。その時つなぎはファスナーを上げるだけになっていた。

そこから先は正に悪夢だった。女の華麗なステップは相変わらずだが、華麗なステップに勢いがつくたびに骨が砕け悲鳴が上がり、血飛沫が飛び散った。女が最後のステップを踏んだ時、血の海の中に立っているのはヒロシと女だけだった。

「お前がこいつらのリーダーか」

「何なんだお前」

ヒロシは電磁ナイフを向けたが、震えて足が前に出なかった。ヒロシには分かった。電磁ナイフなど何の役にも立ちもしないし逃げることも叶わない。俺はここで死ぬのだと。退屈な日常をひっくり返したのは、ご機嫌なハプニングでもパーティーでも無い。死のダンスに他ならない。妖艶な演舞に酔いしれた時、その代償は命だ。

女はじっと二色の瞳でヒロシを見詰めた。ヒロシはその目の奥に、強さだけではなく人類を圧倒するような知性を感じ取った。

「俺はアリス」

「アリス」

某然とするヒロシを省みることなくアリスは背を向けた。

「お前のホバーライダーを暫く借りるぞ」

ヒロシの口からアリスを妨げる言葉は何ひとつの発せられることは無かったし、手に握られた電磁ナイフが持ち上がることもなかった。

アリスがヒロシのホバーライダーに跨り、本来ヒロシにしかリンクしないはずなのにエンジンが始動したことも不思議に思わなかった。ヒロシは跪いた。これは啓示だと思った。俺をこの泥沼から連れ出してくれるための啓示なのだと。俺はこんなカスみたいな奴らとつるんでいてはいけない。俺はここから学び、新しい道を歩まねばならないのだ。アリスは俺を選んだのだ。俺は選ばれたのだ。

「もうすぐ警察が来るぞ」

アリスはそれだけ言うと、ヒロシを残しホバーライダーを発進させた。すぐに海上に降りるとスロットを全開にして飛沫を上げながら闇の中に溶けていった。

ヒロシは呻き声が響く中、一人呆然とアリスが飛び去った闇を見つめ続けていた。

四 逃亡者

東京墨田区スカイツリーのほど近く、一棟の高層アパートの一室にジョーはいた。かつては部屋の窓からスカイツリーが見えた事もあったのだろうが、今では隣のアパートの窓が見えるだけだ。お陰で部屋は明るいがそこかしこに陰があった。建築資材と技術の著しい進歩でこんな低所得者用アパートですらスカイツリーを眼下に望む高さがある。もっともスカイツリー自体は過去の遺産でしかなくなり、観光客もまばらでしかない。

部屋の中はがらんとしており生活の様子がうかがえた。男は無職。その日暮らしの日銭を稼ぎ糊口をしのいでいた。余計なものは一切無い。ある一角を除いて。

その一角だけは異様な雰囲気でも明らかに家主の生活と不釣り合いだった。そこには日銭を稼ぐ男には到底手の届かない高価なコンピューターや機械類が鎮座していた。男は過去にこの機械類を使って仕事をしていたのかもしれない。日銭を稼ぐくらいならこの機械を売れば当面何の苦労もなく暮らせただろうに。それでも手放せない何かがあったのだろう。

その機械類をかばうように男は倒れていた。表情はわからない。なにせ頭蓋骨に大きな穴が空いているのだ。顔があった場所は真っ赤な穴になっていて、反対側を覗くことができた。そのせいで高価な機械も床もまんべんなく血飛沫に赤茶色染上げられていた。血はもう固まっていたが、臭いが部屋に充満していた。

「ひでえ」

血の臭いにジョーは思わず口を覆った。

「殺人ですかね」

ステップが当たり前の事を聞く。どうやったらたったひとりで頭蓋骨に大穴を開けられるんだ。もっとも誰かいたとしても、こんな大穴簡単にあくものではない。そう言おうかと口を開きかけてすぐ閉じた。とてもそんな気分じゃない。

「死後一週間というところでしょうか」

ステップが部屋のあちこちで匂いを嗅ぎ回っていた。

「ジョー。足跡があります」

ジョーも目を凝らしてみたが何も見えない。

「被害者の足の大きさではありませんね」

「とりあえず警察呼ぶか。いや、面倒に巻き込まれる前に退散しよう」

出口に向かおうとしてひどい頭痛に襲われた。視界がぐるぐると回り気分が悪くなった。唐突にひとつのイメージが視界に突き刺さるように現れた。見えるというより、

イメージに投げ込まれたような感覚だった。

痣のある冷酷な顔をした女。左右の目の色が違う。おぞましい程の憎しみが、その目から伝わってきた。この女は明らかに被害者に殺意を持っている。身体中が凍りつきそうな程の冷たい殺意。逃れようとしても触手のように絡みつき逃れる術もなく、絶望へと引きずり込まれる。お前が何処にいようとも、必ず見つけ出して殺してやると。その強い殺意が被害者のMM場に影響を与えている。女はここへやってきた。殺意を持って。そしてその殺意を全て握りしめた拳に集め振り下ろした。

イメージが大きく歪み、視界が崩れた。何かが動いているが判別できない。様々な色が混ざり合う。赤、青、銀、そして黒。

恐怖、絶叫、そして静寂。殺意は消えない。

その殺意がゆっくりと向きを変えた。女が真っ直ぐにジョーを見ている。殺意の触手がジョーに伸びる。後退っても後退っても触手はどこまで伸びてくる。

「止める」

ジョーは叫んだ。

イメージが薄れてゆく。霧が晴れるように通常の視界が戻ってきた。もう女の殺意は感じない。だが、身体の震えはしばらく止まらなかった。額から汗がひと滴床に落ちた。

「くそっ。ステップ。行くぞ。早く退散しよう」

ジョーはよろけながら玄関に向かった。入室記録を録られているし自動で通報も入っているだろう。いまさら退散したところで事情聴取は免れない。だが知ったことか。ここには一秒だって長居はしたくなかった。

そもそもジョーがここにきたのは、墨田区からの要請だった。地区内に異常なMM場の兆候が見られるとユキエの所に連絡が来た。そういった仕事は本来政府御用達の陸奥エンジニアリングが受けるのだが、たまたま手が空いている人間がいなかった。ようするにあぶれ仕事がジョーに回って来るのだ。

依頼内容は異常なMM場の原因調査だ。原因は頭蓋骨に大穴を開けて怪死を遂げた男である。これで原因ははっきりしたわけだから、ジョーの仕事はここまでだ。あとは警察で勝手に調べてくれと思った。

玄関ドアが開いたので外へ出ようとして、強い力で押し返され、ジョーは廊下の壁に背中からもろにぶつかった。痛いという間もなく、無骨な手が伸びてきてジョーの首を壁に押し付けた。目の前に見覚えのある顔があった。

「おやおやおやおや」

ジョーはうんざりとした気持になった。ジョーを押しえつけているのは殺人課のブラ

イアント・バーナー警部補だった。年かきであばた面をしており、いつも百年も着ていそうな薄汚れたコートを着ている。そして何よりブライアントはジョーを毛嫌いしていた。

「こんなところでお目にかかれるとは光栄だね。ジョー」

「離せ。苦しい」

「そうはいかないことぐらい、世間に暗いお前でも分かるだろう。ここは殺人現場だ。殺人現場から誰かが出てくれば、ちょっと話を聴くのは我々警察の仕事だとは思わないかね」

ブライアントが嫌らしい笑みでねちっこい目を向けてきた。歯の隙間にべっとりヤニがこびり付いているのが見え、一層気分が悪くなる。

「死体を発見したから通報しただけだ」

「死体を発見したから通報しただけだ」

ブライアントが嫌みっちらしく真似をする。

「本当は死体を作って通報したんじゃないのか？」

ブライアントはジョーを心底嫌っている。ジョーだけではない。エンジニア全員を嫌い憎んでいた。だが、ジョーに向ける思いは格別のものがあるようだ。くだらないやりとりをしている間ですら、向けて来る目には憎悪がこもっている。

ジョーはその理由も知っていた。かつてジョーが果たせなかった木星調査船事故の被害者救出。その中にブライアントの娘、ナターシャが含まれていたのだ。ジョーたちエンジニアは全員の救出を約束し果たせなかった。誰一人その意識を引き上げることができた者はいない。あの日以来津軽屋はエンジニアリングの世界から姿を消した。津軽屋十四代目のジョーはその看板を降ろし一介の下請けエンジニアに成り下がった。他の仕事の選択肢はなかった。代々エンジニアリングの能力が高い者は周りから変人扱いされていた。見えないものが見え、聞こえない声が聞こえる。そんな人間が普通の仕事に就ける訳がなかった。

「冗談はよしてくれ。俺が来たときにはこうなっていた。記録を見れば分かるだろう」

「さあ、それはどうかな。お前ら詐欺師野郎どもはいつだって他人を欺く。機械だって欺けるのかもしれない。そんなことが誰に分かる？ええ？そうだろう。お前らはドブネズミよろしくこそこそと見えないところで動き回って細工をしてやがる。おい、本当の事を言ったらどうだ。お前が殺したんだろう」

何の根拠も無い事は分かっていた。それでも腹はたつ。

「いい加減にしてくれ。もういいだろう。俺は帰るぞ」

ジョーはブライアントの手を強引に退けようと掴んだ。するとブライアントが力任せにジョーを押しえつけた。

「今のは公務執行妨害だなジョー」

「苦しい。放せ。アテナス。こいつを何とかしてくれ」

ブライアントが鼻先に指を突きつけてきた。

「おい、はっきり言っておいてやる。かならずお前を断頭台に引き上げてやる。ブタ箱なんて生易しいものじゃない。断頭台だ。必ずだ」

<ブライアント警部補。職務規程を外れた行為です>

二人の通信回路に声が割り込んできた。アテナスがブライアントの行き過ぎた行為を指摘したのだ。

ブライアントが押しえつけていた手を離れた。

<ブライアント警部補。簡易裁判結果をお伝えします。二十クレジットの罰金になります。同意しますか>

「わかったよ。同意する」

ブライアントは人差し指をジョーに向けてから死体の方へと去っていった。

「くそっ。気分が悪い。帰るぞステップ」

部屋を出るとすぐ脇に警官が立っていた。その警官はジョーを見るなり、胡散臭そうな視線を向けてきた。教育が行き届いたことだ。見知らぬ警官までがジョーを毛嫌いしている。ジョーはとにかくこの現場から少しでも離れたくなり、転がるようにしてエントランスから飛び出した。途端にロボットタクシーに轢かれそうになった。穏やかな口調で危険を警告するロボットタクシー。その座席には顔が半分崩れた女が乗っていた。それがこの世のものではないことはすぐに分かった。吐き気がこみ上げてくる。ジョーはタクシーを見ないようにしてよろけながら歩き出した。

「大丈夫ですか」

「大丈夫じゃない」

街を歩く人々の間に、時折青白く微動だにしない人影が見える。ゴミをあさる痩せ細った野良犬は腐った肉の間から骨が見えていた。首筋がひどく痛み吐き気を押しえられそうになかった。こんな能力を受け継がなければ惨殺された者達を見ることもない。ジョーは己の能力を呪った。もっと普通の生活をしたかった。

胃液がこみ上げて来て堪らずジョーは路地の入り口で戻ってしまった。あらかた胃の中が空になったころ、またしてもジョーは強い力で壁に押し付けられた。ブライアント警部補だ。

「いい加減にしてくれ」と口を開きかけて見知らぬ顔に戸惑った。

「なんだお前」

男がつば付き帽子の下から鋭い視線を向けてきた。その目を見てジョーは観念した。男はアンドロイドだった。ということは力では敵わないということだ。だがそれにしても何故アンドロイドがジョーをビルの壁に押し付ける必要があるのだろうか。ジョーには全く理由が分からなかった。とはいえ機械が人間に乱暴を働いていいはずがない。

「苦しい。その手をどけろ。命令だ」

アンドロイドは全く力を弱めるそぶりも見せない。どういうことなのか。ロボット三原則はどうなっている。

「聞こえないのか。手をどけろと言っているんだ」

「トムは僕の言う事しか聞かないよ」

男の後ろからおどけたそぶりで一人の小柄な男が姿を現した。男は一見きちんとした身なりをしている風であったが、よく見るとどこか薄汚れた感があり、また世間擦れした印象も受けた。

「何でもいい、こいつを何とかしてくれ」

「トム。もういいよ」

男が言うとトムと呼ばれたアンドロイドが手を離した。その僅かな隙をついて腹立ちまぎれに腹にボディブローを叩き込んだが、むろんトムは眉ひとつ動かさなかった。むしろジョーがパンチを打ってくるだろうと予想していたかのように、打ちやすい位置を空けている風ですらあった。それでもトムの腹は鉄のような固さであった。

「くそっ。馬鹿にしゃがって。手首が折れちまう」

「止めておいた方がいいよ。トムは戦闘用アンドロイドなんだ。その気になれば君を一秒で殺せる」

「ふざけるな。そんなこと誰が許すものか。アンドロイドは人間には手は出せないはずだ」

男がおかしそうに笑った。まるでいたずら坊主のような笑いかただ。ジョーが何も知らないことを小馬鹿にしているのだろう。

「ロボット三原則のことを言っているんだろう？残念ながらガードプログラムが組み込まれているのは量産品だけだよ。トムはプロトタイプなんだ」

自慢気に言う男を無視してジョーは表通りに向かって歩き始めた。こんなヤツに構っている暇はない。講義ならブライアント警部補にでも聞かせてやってくれ。

ジョーの取り付く島もない態度に、男が慌てて追いかけてきた。

「おい、待ってくれ。気を悪くしたなら誤るよ。ちょっと話がしたかっただけなんだ」

ジョーは掴まれた腕を勢い振り払った。そしてブライアント警部補にやられたのと同じように人差し指を鼻先に突きつけた。

「おい、よく聞け。お前が何者か知らん。だが何者だって構うもんか。俺に近づくな」

「トム」

男の一言でトムがジョーの行く手を阻んだ。

「貴様何様のつもりだ」

「頼むよ。助けてくれ。追われているんだ」

男の名前はイワセといった。何でもつい先日までは科学アカデミーで戦闘プログラムの開発をやっていたらしい。そんな超がつくエリートが風采の上がらないエンジニアに一体どんな用があるっていうんだ。ジョーは警戒しつつ招き入れたオフィスのソファで縮こまって座っている小男に、どう接すればよいのか迷っていた。オフィスは元々津軽屋のオフィスとして使っていたが、津軽屋が潰れてそのままジョーの住居となった。オフィスとしてはたいして大きくないが、一人で住むには十分過ぎる広さがあった。その、住居としては広い部屋の中で、イワセは一層小さく見えた。

「あまり害がある相手には見えませんが」

ステップが様子を伺いながら言った。

「見かけはな。ああいう野郎は頭ん中はところてんと変わらない。考えてもみろ。助けを求める相手を壁に押し付けたりするか？」

「まあそうですけど」

ジョーが向かいに座ると、イワセは一層恐縮したように縮こまった。

ジョーはイワセの場を見て息を呑んだ。初めて見た時から気にはなっていた。黒々とした藻の様な場がイワセを取り巻き揺れ動いていた。言うべきか？いや、そんな事を言われても気が滅入るだけだろう。特にこの男に関しては。

「助けて欲しいっていうのは、どういうことなんだ。あいつは」

ジョーが窓際に立つトムを指し示す。

「戦闘アンドロイドなんだろう？しかもあんたが作った最新の戦闘プログラムで動いている」

イワセの目が子供のようには輝いた。

「そうなんだ。タイプX12はね、ザンビア戦線で活躍したタイプX11の後継モデルなんだ。タイプX11にはできなかったトータル・オペレーション・マネージメントを組み込んである。戦局を読めるんだよ。すごいだろう。ジョー。君の動きも彼が予想し

たんだ」

ジョーがイワセを睨みつけた。

イワセがまた縮こまる。

こいつ子供免許でも持っているのかとジョーはいぶからずにいられなかった。

「その最強アンドロイドがついていて、何で俺があんたを助けなきゃならない。俺は刑事でも兵士でもない。ただのエンジニアだ」

「エンジニアだからだよ。あいつの相手をできるのはエンジニアだけなんだ」

ジョーはステップと顔を見合わせた。

「誰だあいつってのは」

「アリスだよ。アリゾナの研究所を脱走したアンドロイドだ。アリスはタイプX11の戦闘プログラムを組み込んである」

「だったら、余計都合がいいじゃないか。トムの方が上手なんだろう？」

「アリスはタイプX11だけど、ひとつだけ特殊な機能を付け加えてある。そいつが厄介な代物でね」

ジョーはうんざりした気持になった。ジョーの周りには厄介でない代物なんてあるのだろうか？

「何が厄介なんだ」

「アリスはエンジニアリングができる。MM場センサーを持っているんだ。しかもアリスはネットワークから分離して動く事が出来る。それが一体どういうことだか分かるかい？アテナスの目をかいくぐる事ができるんだよ。アテナスの監視を逃れることができる機械がこの世に一体どれだけあるか知っているかい？」

知りたくもない。世に検索できない機械があるなんて考えられないことだ。

「だから君の所に来た。君ならアリスの考えてる事が分かるんじゃないかと思ってね。世界最強のアンドロイドと、世界最高のエンジニアが手を組めばアリスにだって対抗できる」

ジョーは勢いよく席を立った。その勢いに圧倒されてイワセが口を開けたまま石のように固まってしまった。こいつはエンジニアを何だと思っているのだろう。超能力者とか呪い師の類と勘違いしているのではないか。確かにエンジニアリングには機械には出来ない側面がある。だからこそジョーたちのようなエンジニアが存在する。だが、エンジニアリングに関係があるのは人間だけだ。エンジニアリングは人間の意識と密接に結びついている。意識という、MM場を創り出す特殊な精神の働きを持たない機械とは無縁の世界だ。いくらアリスがMM場を読めた所で何ができるとも思えない。アンドロイドは、プログラムという外的要素の分析と反応、及び確率に基づく予測で行動している

。どんなに煎じつめてもそれは精神の働きではない。知識としての意識を知っていても、反応と予測から千差万別な人間の思考を導き出すことも、感情を捉えることもできない。つまり人間の意識を理解していなければ猿に銃を与えるのと同じで力の持ち腐れだ。一発くらい偶然ぶっ放すかもしれないが。

ジョーは冷蔵庫からビールを一本取り出すと一気に呷った。それから呆然としているイワセに向き直った。

「馬鹿にしているのか？帰れ。俺は世界最高なんかじゃない」

「だって政府御用達だったんだらう？木星でも活躍したじゃないか」

「木星の事を知っているならなおさらだ。今の政府御用達に頼めばいいだらう」

イワセの顔がみるみる悲壮感を帯びていく。だからといってここにいて何になるっていうんだ。アリスとかいうアンドロイドに対して結界を張れとでもいうのか。そんなことしたところで、得意の戦術プログラムで攻め込んでくるだけだらう。しかもガードプログラムが付いていないアンドロイドなんて、ブレーキが壊れた暴走列車と同じだ。相手にするなんてまっぴらごめんだった。

「俺の仕事はMM場を落とすことだ。戦闘は得意じゃない。残念だがあんたの役には立てない。なんならそいつに」

ジョーはトムを指差した。トムの冷たい目が見返してくる。その目の奥で一体何を考えているのだろうか。どうすれば俺を屈服させられるか？それならまた壁に押し付けられればいい。

「MM場センサーを付けられればいいだらう。あんたの得意技だらう」

「MM場センサーを開発したのは僕じゃない。クエーカーだ」

「だったらそいつに頼むんだな」

イワセが下を向いて小さな声で答えた。

「クエーカーは頭を割られて死んだ。アリスの仕業だよ。さっき墨田区のアパートで死んでいたのは、ホズミ元運動制御プログラム技術部長だよ。次は間違いなく僕の番だ。頼むよ助けてくれ」

アンドロイドが人間を殺したなんて信じられない事実だ。だとしても自分には関係のないことだ。科学アカデミーの技術者たちが何人狙われようとも知った事ではない。そういうことは自分たちで解決すればいい。ジョーは冷たく言い放った。

「俺には関係のないことだ」

だが、次の言葉でジョーは持っていたビールを落としてしまった。

「残念だけど、そうでもないんだ。アリスは君のことも狙っている。だってアリスが狙

っているのは単に科学アカデミーのメンバーではないんだ。木星調査の事故に関係した人間なんだよ。元々木星調査は全員アンドロイドへの意識転送で行う予定だった。だけど予算とかスケジュールとか、そういった諸々の事情でクロダ隊長だけが意識転送を行った。アリスもまた木星に行くはずだったからMM場センサーを取り付けたんだ。でも間に合わなくなって急遽戦闘用に改良されたんだ」

こぼれたビールがジョーの足を濡らした。だがそんなことも気がつかないほどジョーは動転していた。

「どういうことだ。何で俺が狙われる。俺はエンジニアだぞ。計画とも事故原因とも関係はない。社会的な制裁だって受けた。津軽屋は潰れたんだ」

「そういう事じゃないんだ」

「じゃあ何なんだ」

イワセはしばらく言いよどんでいた。

「科学アカデミー時代の友人に聞いたんだ。アリスにはMM場が取り憑いている」

イワセの顔が奇妙に歪んだ。自分でも言っていることが信じられないのかもしれない。

「なんだって」

「アリスにはクロダが取り憑いているんだ。そしてクロダは木星事故の関係者を恨んでいる。だから一人一人復讐しているっていう訳だよ」

「そんな馬鹿な」

ジョーの脳裏に十年前の事故の様子が浮かんだ。必死で行った救出活動。だが誰一人救う事はできなかった。なぜならば、木星調査船には強力な結界が張られていたのだ。結界は非常に強力でおかつ複雑だった。ジョーはあらゆる手段で結界崩しを試みたが、ついに結界の中に入れなかった。そして中に封印された意識は外に出られなかった。やがて調査船の爆発と同時に結界は崩れ、多くの人が死んだ。そしてクロダ木星調査隊長もまた。

クロダはアンドロイドに意識転送していた。だからクロダだけは助けることができたはずだった。ところが調査船に張られた結界にはもう一つ罠が仕掛けられていた。崩壊と同時に奈落を生み出したのである。

奈落は精神のブラックホールだ。MM場をどこまでも引き延ばし拡散させる。MM場を落とす有効な手段ではあったが、周りの意識も全て飲み込んでしまう。奈落が生まれた時、クロダを含めて調査隊員の意識は全て飲み込まれた。そしてジョーもまた飲み込まれかけた。ステップが外から引っ張ってくれなかったら、今頃は光も時もない永遠の闇を彷徨っていただろう。意図的に生み出された奈落は、MM場の代わりに意識を飲み

込み消滅した。そして本来飲み込むべきMM場だけを残した。

そんなことができるエンジニアを、ジョーは一人だけ知っていた。

ユウ。

顔も見たくない相手だ。

ジョーは事故で心に大きな傷を負った。もしあの時結界を崩せていればと、何度思ったか知れない。ただ一度の失敗。そして埋め合わせることができない大きな失敗。ジョーの未来は軌道を大きく逸れ、そして今がある。

「もしかしてコーンから逃げたMM場がアリスに取り憑いたってことか」

「逃がした魚が戻ってきたではないですか」

ステップが目をくりくりと回しながら答えた。

「軽く言うな。相手は戦闘アンドロイドだぞ」

「戦闘アンドロイドならここにもいますよ」

イワセが応える。

「くそっ。なんでこんな目に」

ジョーは大きなため息を吐いた。

不思議な感覚だと思った。

あの時、得体の知れない何かが身体を貫いてから、ずっとアリスを悩ませ続ける不思議な感覚。それが何なのか未だに答えは出ていない。

風が髪をゆらして通り過ぎていく。足下では安全灯が赤い点滅を繰り返し、アリスを漆黒の闇の中に赤々と照らし出していた。

アンドロイドというものはプログラムで動いている。それを否定しても始まらない。機械なのだから。指一本一本の動きから風が頬を撫でた時の抵抗感覚まで、全てプログラムを通して数値化され判断材料となる。行動原理も同じことだ。過去全ての行動はプログラムによって決定されてきた。アリスの電子頭脳の中では膨大な量の命令が繰り返され、その一つ一つが行動を組み立てている。迷いも無ければ躊躇もない。アリスが東京みなとブリッジの、海上二百メートルの高さがある塔のてっぺんに立っているのも、あらゆる効率化を判断したプログラムの出した回答である。ここがネットワークを介さずに人を捜すのに最適と判断したためだ。

アリスの中にはいま、過去の経験に合わないし、数値化できない感覚があった。経験がないから言葉に置き換えることもできない。そして驚いたことに、プログラムの決定ではなく、その感覚自体がアリスの行動を左右するようになった。どうして行動を左右できるのかも説明できない。インプット情報がないのにアウトプットの動作があるのだ。命令元がないのにアクチュエーターが動き、手足が動く。それはアリスの思考を無視しての動作ではない。明らかに思考とリンクしている。だが、リンクの先をアリスは追う事ができない。電子頭脳のどこにも命令元がない。動作プログラムを追っていけばいつも通りのプログラムに行き当たってしまい、決定とはすぐわないのである。

ならばバグなのかといえばそれはあり得ない。プログラムはアテナスと同じなのだ。何度自己診断を試みても答えはいつも正常である。

それはどこか遠い世界からの言葉に思えた。自己という存在を超えた存在からの囁きだろうか。そういった考えを人間達が持っていることは知っている。だが自分がその考えに賛同することはないと思っていた。なぜならば理解できないから。プログラムにはプログラム以上のことは分からない。分からないことを考えても仕方が無い。非効率なのだ。ところがアリスは今その非効率を試している。その存在を信じ身を任せてみようと考えていた。それはとても強い欲求であり無視できない。無視することで非効率が生じる。そしてまた、従うことはどこか心地良さを伴った。それが正しいように感じるのである。

アリスは夜空の端でぽつりと浮かぶ月に手を伸ばした。そして月を掴むようにして拳を握りしめた。小さな人の頭蓋骨など粉々に砕く力を持つ拳は僅かに震えていた。震えの源は怒りであった。電子頭脳の外から囁く声。その声が拳を震わせる。

……思い知らせてやれ。

外からの声が囁く。

……やつらに思い知らせてやれ。一人残らず。

その声は言うのだ。私を見ろ。声を聞け。そして従えと。自らの存在を超えた存在に、逆らう事ができないのならば従う事だ。それが一番効率的なのだから。

受け入れた途端に体中を戦慄にも似た震えが駆け抜けた。様々な想いが浮かんで消えていった。木星調査船での事故のこと。目の前で重力に押しつぶされていく乗組員たち。想いは自らの思考に、そして意志になる。結界を張り我が意識を閉じ込めた連中をどういう風に切り刻んでやろうか。手足を引き千切ってやろうか。どいつもこいつも生かしてはおかない。黒い意志がアリスの中で膨らみ渦巻いた。これこそが我が意志だと。

その声が示した人物は全部で四人。木製調査計画最高責任者のテンマ元科学アカデミー長官、計画立案者のホズミ元科学アカデミー副長官兼総務統括部長。木製調査計画技術顧問のイワセ元技術開発計画部門長兼戦闘プログラム開発部門長。そして木製調査計画災害時救出特別顧問の津軽屋十四代目エンジニア、ジョー。ホズミは既に死亡を確認した。残りは三名。

先日、クエーカーの山荘で想定通りシルバースネークと接触。そしてあの爆発が起こったわけだが、その後事故調査隊が来ることは目に見えていたので待ち伏せしていた。案の定調査隊の連中はのこのことやって来た。緊張感の欠片も無く。クエーカーは既に過去の人となっていた。そのような人物が死のうがどうなるうが、どうでもいいことなのだろう。

アリスはやって来た調査用無翼ヘリに乗り込むと、三人の調査員の前で指向性対人地雷を掲げて見せた。アテナスから必要情報を引き出し科学アカデミー長官に適当な情報を報告させ、そのままシベリア南部にある小さな村に向かわせた。そこでは非合法組織による売春が行われている。往々にしてこういう連中は仕事のあとにこういった場所に寄るものだ。そしてこういった場所には必ず行動ログの改ざん屋がいる。調査隊の三人が共に仕事のあとの不自然な時間帯に睡眠を取るような記録がされても、また悪い癖が出て記録を改ざんして遊んでいると思われるだけだ。そして彼らは今シベリアでお気に入りの娘をみつけ、それぞれよろしくやっていることになっている。

アリスは今一度情報を確認した。それらは過去の情報で今現在ターゲットがどこにい

て何をしているかまでは分からない。ネットワークにつないでIDを追っていけばすぐにわかるが、こちらの検索も察知されてしまうし、検索対象からアテナスがこちらの意図を探り出してしまうかもしれない。だからアリスは特殊能力を使うことにした。全ての体内エネルギーが集中し右目が青く光り始めた。眩いばかりの東京の夜景が、色を失い黒々とした蠕動する砂漠のような光景へと変貌していく。黒い砂の一粒一粒はすべて数字である。

9. 80665

地球上で観測される重力加速度である。ところがこの値は地表面でフラットではない。様々な値が蠕動するがごとく観測される。決してビルや地形によるものではない。それらは全て人間なのである。なぜ地球に対してあれほど質量差がある人間が、このように重力加速度を変化させてしまうのかアリスには理解できない。ただこの右目が人間とはそういったものだを教えてくれる。それが意識でありMM場と呼ばれる特殊な重力場であることを。強い意志を持つ人間は大きな数字を保有するし、その周りに多くの人間が集まる。そしてその数字は人々に伝播していく。場として。意志は受け継がれるものだから。そして意志が遺志となったときそれはエンジニアリングを必要とするMM場に変化する。それらの数値が僅かに変化しながら蠢いている。それはさながら都市という巨大な生物が呼吸を繰り返しているようであった。

いまアリス自身MM場を保有していることをアリスは観測できる。一介のアンドロイドに意識があるはずがない。機械はプログラムで動くものだから。きっとそれは、アリゾナの砂漠で体験したあの現象と関係があるのだと思う。

やがて真っ黒な数字の砂漠から二つの数字が拾い上げられた。

見つけた。思考は待つ。己を超えた存在からの声を。血塗られた命令を。それが人間の命を奪う命令だとしても、アリスは躊躇しない。命令は絶対だ。俺はこの男を殺さねばならない。発見者が恐れおののくような残虐な方法で。

声が命ずる。行けと。

身体は冷静に命令を実行する。アリスはホバーライダーに飛び乗ると一気に水面まで急降下した。水上を加速するアリスの顔に表情は一切ない。アリスはただ命令を実行するだけだ。

「誰かがやってきます」

ステップの言葉に全員が動きを止めた。

「図られましたね」

トムの言葉に全員が振り向いた。

「どういうことだ？」

「アリスにここに集まるように仕向けられたのです。我々はアリスがMM場に取り憑かれているという情報を、科学アカデミーメンバーから入手した。だからジョーと接触しました。でもその情報の出どころはきっとアリス本人でしょう」

「何で自ら情報を流すんだ」

ジョーには機械の考える事など到底理解できない。

「我々をここに集めるためです。その方が効率がいいですから」

「冗談じゃない。トム、お前はX12だろう。何で気がつかなかったんだよ」

イワセが怒鳴るが誰も相手にしない。トムの表情は変わらないが、その電子頭脳はすでに一つの作戦を導き出しているのだろう。

「アリスなのか？」

「分かりません。IDがガードされています。招かれざる客ということでしょうか」

「粹なことを言うじゃねえか。犬のくせに」

「犬ではありません。犬型のアンドロイドです」

「なんだっていい。それより敵さんは今どこにいる」

敵という言葉を使ったことでジョーは本当にトラブルに巻き込まれていることを実感した。

すぐにビルのホストコンピューターが来客のメッセージを送って来た。IDを隠しているわりに人物の姿はそのまま転送されてきた。その相手を見てジョーは息をのんだ。

「元気？すぐにそこに行くわ」

微笑みながら手を振った人物はユウだった。

ユウは元々陸奥十四代目のエンジニアである。陸奥はジョーが木星事故で失敗した後、政府御用達に指定され一気にその規模を拡大したエンジニアリング企業である。その第十四代目を襲名したのがユウであるが、ユウにはいつも黒い噂がつきまとっていた。元科学アカデミー長官のテンマとの闇取り引きもその一つだ。

そしてユウが最も得意とするエンジニアリングが奈落である。その強引な手法に賛同しない者も多いが、津軽屋零落の後、ユウを超えるエンジニアは一人として現れてはい

ない。悪名を含めなくとも、今や名実共にユウがエンジニアリングの第一人者だった。

ジョーをここまで追いつめた張本人が一体何の用があるというのか。ジョーは自分の中で感情が押さえきれなくなっていくのを感じていた。

「ジョー。彼女とは話さないほうがいいと思います。あまりいい結果にはならないでしょう」

「分かっている」

イワセが切羽詰まった言葉を投げかけて来た。

「僕がここにいることは言わないでくれないか。あの人とはうまが合わないんだ」

「こんな時代だ。もうばれているよ。それに」

ユウ到着のメッセージが届いた。玄関の前にいるということだ。

「やつとうまが合う人間がいるとは思えないな。ステップ。玄関をセキュリティレベル最大にしろ」

「もう済んでいます」

その時だった。窓の外のホバーライダー発着スペースに轟音を響かせて何かが着陸した。全身シルバーメッキの電磁塗装を施し、陽光を受けて輝くアムロイド。間違いなくシルバースネークのギンジである。シルバースネークは科学アカデミー長官クロダの闇の実行部隊だ。それを知る人間は多くないが、クロダの黒い噂の影には必ず登場する。そしてユウもまたシルバースネークの一員であった。そしてジョーの部屋にはイワセというクロダと関係深い人物がいる。ということは今回の来訪にはクロダが絡んでいる。つまりシルバースネークは故クロダの遺志を継いでいるということになる。クロダのMM場はそれほど影響が強いものなのか。

アムロイドは圧倒的な力で窓を破壊し部屋に侵入してきた。

トムはこの展開を予想していたのか、すでにイワセを安全な位置へと移動させていた。

シルバーメッキの全長2メートル半の巨体がジョーの目の前に立ちはだかった。

「よう。邪魔するぜ。久しぶりじゃないか」

「何様のつもりだ」

「つれないことを言うなよ。俺とお前の仲じゃないか。まあ、今日用があるのはお前じゃなくて、あいつだがな」

アムロイドの右腕がイワセを指し示した。そして前腕上部からガトリングガンの黒い銃口が飛び出した。

ガトリングガンが火を吹く直前にアムロイドの右腕が跳ね上げられた。トムが下から腕にアッパーを繰り出していた。耳をつんざく銃撃音と同時に天井のハイパーセラミ

ックが砕け散る。

ジョーは頭を抱えながら床に伏せた。ステップが脇に滑り込んで来た。

イワセが耳をつんざく悲鳴を上げている。

トムはその素早い動作でアムロイドの背後を取っていた。戦闘アンドロイドだけにアムロイドの欠点を知り尽くしているはずだ。たとえ武器を持たなくても勝算があるように見えた。

ところが次の事態を予想していた者は誰もいなかった。わずか直前にステップが気がついただけだ。

「来訪者も武器を持っています。大きな武器です」

直後に玄関が爆発して扉が窓の外まで吹き飛んでいった。

「ちょっとノックが強かったかしら」

ユウが手にしていたのはE・C・Gエネルギー変換推進銃、通称グラスロードガンである。物質エネルギーを推進エネルギーに変換する弾丸を使用する銃で、エネルギー変換時に十萬度の高温を発するため、周囲一メートルの物質を灼熱で全て溶かしてしまう。弾丸は自身のエネルギーを使い切るまで、障害物を溶かしながら推進し続ける。そのため弾丸が通った後は約一キロメートルに渡って溶解したガラス状の道ができる。その軍隊が使うような銃をどうしてユウが持っているのか。個人的な恨みで手に入れられる代物ではない。

「畜生。あんなもの持ち出されたら隠れたって意味が無い。ステップどうやって逃げればいいのか教えてくれ」

「私たちがエアカーまで辿り着ける確率は3パーセントです。あるいはトムが善戦してくればもっと確率が上がります」

「どれくらいだ」

「5パーセント」

「くそったれ。何か方法はないのか」

そのトムは確かに武器がないにしては善戦していたが、グラスロードガンによって作戦を崩されてしまい、今や防戦一方となっていた。徐々に追いつめられていく様子は素人目にも明らかだった。あと数分もすればトムはガトリングかグラスロードガンの餌食になり全てが無意味になる。ならば投降を試みるのもひとつの手ではある。

こうしている間にも天井からはハイパーセラミックの欠片が嵐の様に降り注ぎ、ガトリングガンの鋼鉄の雨であらゆる物が破壊されていく。銃撃音は全ての音を消し去り、希望も何もかもを打ち砕いていった。

唐突にガトリングガンの音が途切れた。

初めは何が起きたのか全く理解できなかった。

恐る恐るジョーが顔を上げると窓辺に天使が舞い降りていた。

夢かあるいは自分は死んだのだろうと思った。

だがしかし、それは天使ではなく、左右違う色の瞳を持ったアンドロイドのアリスだった。

アリスは微塵も躊躇しなかった。踊るような優雅な仕草でアムロイドに組み付き、右腕を取ったと同時に満身の力でひねり上げた。金属がひしゃげる音がしてアムロイドの腕が動かなくなった。

「今です。ジョー。ボスを連れて逃げてください」

トムはこれを待っていたのだ。トムが飛び上がりアムロイドの顔面に膝蹴りを食らわした。

アムロイドはたまらず背中から倒れ込んだ。

二体の戦闘アンドロイドの見事な連携だった。

ところが次の瞬間、二体のアンドロイドは互いに相手にストレートパンチを放った。互いにすんでのところかわして弾けるように離れた。

イワセが再び悲鳴を上げた。

そう、そこにいるのはアリス。イワセとジョーを殺しにやって来た殺人アンドロイドだ。

互いに隙を窺っている。戦闘力ならトムが上だ。だが、アリスの狙いはトムではなくイワセとジョーである。自分を守るのと人を守るのではやり方はまるで違う。

さらにそこへアムロイドが復活して参戦した。ガトリングガンがなくてもアムロイドの戦闘力も決して低くはない。アムロイドがアリスを攻撃すれば、アリスはそれをかわしながらトムを攻撃し、そのトムはイワセを守りながらもアムロイドに攻撃をくわえる。三つどもえを超えたバトルロイヤルが始まっていた。

「ジョー。早く逃げましょう」

ステップの言葉にジョーは我に帰った。壁際をネズミのように這い進む。みっともないがそんなことを気にしている場合ではない。ところがすぐに障害物に行き当たった。丸まったまま悲鳴を上げるイワセである。

「おい。しっかりしろ。逃げるぞ」

だがイワセは悲鳴を上げ続けている。ジョーは何も考えずに鼻に拳を叩き付けた。悲鳴が止まった。

「こい。逃げるぞ」

すぐ脇では誰一人一步も引かない戦いが続けられていた。僅かでもその腕がかすれば一巻の終わりである。

ジョーたちが逃げ出そうとしているのをユウが見つけた。だが、部屋中を猛スピードでアンドロイドたちが駆け回っていた。その中にギンジのアムロイドも含まれている。うかつにグラスロードガンを使う訳にはいかなかった。

「ギンジ。やつらが逃げる」

ユウが声を上げた時にはもうジョーたちはエアカーに辿り着いていた。

「ステップ。運転しろ。緊急事態だ。規則は全て無視していい」

「努力します」

エアカーはドックから切り離されると一気に落下した。

エアカーが道路に合流する直前に上から何かが降ってきて後部にぶつかった。エアカーが大きく揺れた。

「ちくしょう。やられた」

だがエアカーのスピードは落ちない。やがてトムがドアを開けて車内に乗り込んで来た。音の原因はエアカーに向かって飛び降りたトムだったのだ。

「驚かせるなよ。それで、どうなったんだ」

「アリスがアムロイドの身体を真っ二つに引き千切って終わりです。アムロイドにかぎらず、ヒューマノイドタイプは腰が弱点です。力が集中するので強化が必要ですが、強化すれば動きが鈍ります。どうしても弱くなる。そこをアリスは狙ったのです。見事真っ二つでしたよ。私はそのタイミングを見計らって飛び出したのです」

戦いの最中に状況をしっかり見ていて、ジョーたちが脱出するタイミングと飛び降りるタイミングを見計らっていたようだ。さすがに最新型だとジョーは関心した。

だがそのジョーの顔を見てトムは言った。

「安心してはいけません。アリスは必ず追ってきます」

言うが速いか後方からホバーライダーが追ってくるのが見えた。

「運転を替わりましょう」

ステップに変わってトムがエアカーにリンクした。途端にスピードが跳ね上がった。ステップはなんだかんだ言って量産品である。交通ルールを破ることができない。だがトムはプロトタイプだ。戦いに勝つためならなんだってやるのだろう。現に軽くするために荷物室の中身を道路にまき散らしながら低空飛行を続ける。走行に切り替えないのにも理由があるにちがいない。

「どこに逃げるつもりだ」

「科学アカデミーにしましょう」

イワセが口を挟む。

どこからそんな発想がでてくるのか。

「お前クビになったんだろう？」

「研究室に裏口を作っているんです。あんな優遇された環境を簡単に手放せますか」

イワセがいたずらな笑みを見せる。本当に子供のような男だ。

「特別なものを見せてあげますよ。きっと驚きます」

「何だっていい。とにかく辿り着け」

ところがトムはエアカーを急ハンドルで路地に滑り込ませた。その拍子に何台かのエアカーが事故を起こした。すぐにパトカーのサイレンが聞こえたが待っている余裕はない。

「残念ながら科学アカデミーまで辿り着けそうにありません。すぐ後ろまで来ています。この辺りにアリスを阻めるような建物は無いでしょうか。科学アカデミー並みに丈夫な」

トムが商店街を突っ切りながら聞いた。八百屋の商品を跳ね飛ばし、フロントガラスに飛び散ったトマトの残骸が血糊のようだ。

「アリスにはMM場が取り憑いていると言ったな。丈夫の意味が違うが、陸奥エンジニアリング本社に向かえ。三分で着く」

「分かりました。三分持ちこたえてみせます」

三分後アリスの追撃をかわしてジョーたちは陸奥エンジニアリングの地下駐車場に滑り込んだ。入り口直前でアリスはホバーライダーを急停止させ、歯ぎしりでもしそうな顔で入り口を睨みつけていた。

アリスが入ってこないことが分かると、イワセが大きなため息をついた。

「どうして入ってこないんです？」

「ここは東京でもトップクラスの結界が張られている。おそらく皇居と同じレベルだろう。何せ政府御用達のエンジニアリング企業だからな。MM場に取り憑かれた連中が入れる場所じゃないんだ」

イワセは心からほっとしたのか高笑いを始めた。その笑い方が実に不愉快だった。どの世界にもいる。ついさっきまでへりくだっていたくせに、優位に立った途端に態度を変える人間が。イワセもその部類なのだろう。ジョーはこいつとは友達にはなれないと思った。

「ボス。残念ながら戦局は我々に不利です」

「なんでだ。あいつは入ってこられないんだろう？」

「持久戦ならアンドロイドほど適している者はいません。必要なら何年でも待つ事ができます」

たちまちイワセから笑みが消えて、小心者の顔に戻ってしまった。

「おい、お前達はなんだ。貴様ジョーか。外道が何しに来た」

全員に通信が入る。陸奥のエンジニアのヨシツネであった。言葉のひとつひとつに敵意を感じた。ここもあまり安全ではないかもしれない。

ヨシツネは先日亡くなったシルバースネークのベンケイの兄である。ベンケイと同じく肉体改造派であるため、クマのような身体をしているし、顔つきもクマそのものだ。その粗暴な感じがジョーは嫌いだった。

ヨシツネもまた常日頃から津軽屋とジョーを目の敵にしている。津軽屋は無くなったとしても犬猿の仲であるジョーが突然現れれば、何かしらの疑心を持って不思議ではない。だがそれにしたってジョーへの憎しみはただ事とは思えない様子であった。

「その、何だ。ちょっと顔が見たくなってな」

疑うような目を向けていたヨシツネの顔が嫌らしく歪んだ。

「ははん。さては仕事を貰いにきたんだろう。ざまあねえぜ。落ちぶれたな津軽十四代目。お前のような人殺し野郎にくれてやる仕事はない」

「なんだと。誰が人殺しだ」

「聞いたぞ。お前がベンケイを罠に陥れたってな。お陰でベンケイは死んだ。確かに真っ当な人間じゃなかったかもしれない。それでも俺のたった一人の弟だ。て前のやったことは絶対に許さねえ」

「何のことを言っているのか分からないな。弟が死んだって。そりゃ災難だったな」

ヨシツネの顔が怒りで真っ赤になった。

「おい、今からそこへ行く。逃げるんじゃねえぞ」

険悪になる二人の会話に割って入った人物がいた。ユキエだった。

「ちょっとよして。どうしてすぐにこうになるのよ。それよりジョー。どういうつもりなの。仕事なら私がちゃんと回しているじゃない」

「なんでお前がここにいるんだ。それに仕事を貰いに来たんじゃない。ついでに言えば来たくて来た訳じゃない」

「その言い草はないじゃない。次の仕事の打ち合わせをしていたのよ」

横からヨシツネが顔を出す。

「ひねり殺されたくなくちゃ、とっとと失せやがれ」

「やめてってば。どういうことなのか説明してよ」

どう説明したって頭を下げるしかない立場だ。あのヨシツネに頭を下げなければならぬことに、ジョーの顔が醜く歪んだ。それを察したかのようにトムが口を開いた。

「私から説明しましょう。実は……」

ブライアント・バーナー警部補は墓石の間を進んでいった。宝生寺の境内は閑散としていた。今時誰も仏教を信じていないからだ。金持ちはみなコールドカプセルに入り、将来蘇生するつもりだし、金持ちではない人間どもはみな、ネットに魂を売り渡していた。世界をつないでいるテラネットの中に、完全意識とかいう意識の固まりみたいなものを作り上げ、そこに融合してしまうのだ。

なんでも完全意識は人間としての欠点が全くない、完璧な意識体だということだ。

修行を積んだ坊主みたいなものか？

ブライアントはそれがどんなものなのか知らないし、知りたいとも思わない。人間は死ねば土に還り、消えてなくなる。それでいいじゃないかと思う。ブライアント自身宗教は信じていない。だから皆の忠告も聞かずに一番家から近いここを選んだ。せめてキリスト教式にして欲しいという、別れた妻の言葉も無視した。人は死ねば終わりなのだ。

そもそも、仏教を布教しないといけない坊主ですら、仏教を信じていない。ネットに繋がっていない寺など無いし、完全意識を薦める坊主までいるくらいだ。完全意識と言ったって、意識を粘土みたいに集めてぐちゃぐちゃと捏ねて丸めりゃ完璧になるなんて発想が気に食わない。人間はそんな単純なものじゃないと思う。いまだに完全なアンドロイドを誰も作れないのが良い証拠だ。

だいたい完璧って何なんだ？

単なる無個性なんじゃないか。誰一人そこに答えを出さないまま、時代だけが進んで行く。考える事を放棄して何が完全だとブライアントは思う。

腹立たしくなったブライアントは墓石に添えられた花やお供え物を、片っ端から蹴散らして歩いた。防腐処理を施され、決して枯れる事が無い花が、ちぎれて舞い散る様を見てブライアントはいくらか気分がよくなった。

ブライアントは一つの墓石の前に立った。墓石にはレイチェル・バーナーと刻まれている。ブライアントは神も仏も信じない。でも、墓は必要だと思う。なぜなら、時々こうして訪れることで、レイチェルのことを思い出すからだ。愛らしかったレイチェル。ブロンドの髪がとても美しく、何事にも前向きだったレイチェル。そのレイチェルのことをこうして想う時間がブライアントには必要だ。自分が死んだ後も、こうやって自分を想ってくれる人間はいるのだろうか。いないかもしれない。元妻は自分のことを、目的のためなら手段を選ばない非道な人間と言っていた。その通りだと思う。仕方の無いことだ。刑事として生きるということは、そういうことなのだ。

ブライアントはウィスキーの入ったスキットボトルを片手に、たっぷり一時間墓石の前で思い出に浸った。アパートに帰り玄関を潜るとピアノの音がした。わずかにそれが勘に触る。

「お帰りなさい」

若い女がピアノを引いていた手を止めてブライアントの方を振り向いた。

肌はつややかであり、ブロンドの髪が光を反射して美しく輝いてる。口元にはいつも笑みをたたえ、蒼い瞳は生きる喜びに輝いている。

「うそだ」

「どうしたの？」

女の顔が少し曇った。

「うそだ、うそだ、うそだ」

ブライアントの歪んだ顔を見て、女がうろたえ始めた。

「どうしたの。お父さん。落ち着いて、何があったのか話してみて」

その言葉でブライアントの中で最後の均衡が崩れた。ブライアントは上着の内側から銃を取り出すと女に向けた。

「何がお父さんだ。お前なんかレイチェルじゃない。このくそアンドロイドめ」

ブライアントは何度も引き金を引き絞った。その度に乾いた音が響き、アンドロイドの身体に穴を開けていった。

「止めて。お父さん、やめ...ギギ...」

アンドロイドは六発の電磁パルス弾を受けてその機能を停止した。

「ホンダのスパイ野郎め」

すぐにOBSがホンダからの通信を通知してきた。視界の隅にアイコンが点滅する。回線をつなぐと営業が愛想良く、しかし僅かに懸念を持った笑顔で切り出してきた。

「当社のアンドロイドに何か不具合がございましたか？」

「いや、何でもない」

「アテナスからのログによれば、機能停止までに六発のパルス弾を受けたようですが、理由を教えてくださいませんか」

「理由を教える必要はない。勝手に画像をみて判断すればいいだろ」

「我が社でもブライアントさんのケースは出来る限り考慮してきたつもりです。娘さんを木星の事故で亡くされたのですから、その心痛は量りしれないものでしょう。ですから過去二回の破壊は不問とさせて頂きました。しかし三度目ともなれば事情も変わってきます」

「何がどう変わるっていうんだ。俺の娘はアンドロイドじゃないし、あんな喋り方はし

なかった」

今や営業の顔には愛想の色は微塵もなかった。

「設定は全てアテナスの記録を元に行われています。美化された思い出を含めたいのであれば、始めからそうおっしゃってくださればよかったです。ですが、あなたは生前の姿そのまま、というご希望をなされた。違いますか」

「機械に何がわかるんだ。いつからアテナスは神になった。あいつはいつだって俺たちをこそこそ覗き見してマスかいているだけじゃないか。そんなヤツに何がわかる。俺の娘は殺されたんだぞ。くそいまましいエンジニア野郎に。あいつらこそいかれている。何がMM場だ。あいつらは事故を起こしたくせに、事故の後に娘に会わせると言っておきながら何もできなかったじゃないか」

ブライアントは喚くだけ喚くと、力なくソファーに座り込んだ。

「ブライアントさん。エンジニアの件は私どもの管轄外です。娘さんの件は御気の毒ですが、正直に申し上げてこちらで保証できる範囲を既に超えていますので、すぐに簡易裁判記録が発行されるでしょう。責任がどこにあるのかは明白です。誠意ある対応を期待しています」

それだけ言うと通信は切れた。そして簡易裁判記録が送られてきた。記録を脳内に展開する。故意にアンドロイドを破壊した場合の罰則は100クレジットだ。アンドロイドは最早家電とかわらない。そして記録の最後にはアテナスの署名。裁判記録の署名がコンピューターなんてひどい世の中だ。いつかアテナスの心臓部に侵入してガトリングガンをぶっ放してやりたい。ブライアントは銃に弾丸を装填し直すと、倒れたアンドロイドに向かって銃が空になるまで銃弾を打ち込んだ。顔の上半分が亡くなり、床がえぐれて強化コンクリートがむき出しになった。それでも気持は収まらなかった。

2112年。ブライアントの娘レイチェルは晴れて科学アカデミーの木星調査隊に選ばれた。常々太陽系調査を希望していたレイチェルにとっては、夢が叶った瞬間だった。そのためだけに勉強をし、訓練をこなしてきたし肉体改造も受けたのだ。宇宙探査には危険が伴う。だからアムロイドによる探査が中心であったが、木星という長距離の実績がなかったため、隊長のクロダを含む数名のメンバー以外は全員生身の肉体で乗り込むことになった。

そして木星で事故が起こった。太陽電池パネルを含む、全ての発電装置が一瞬にして機能を停止した。理由は設計ミス。船内全体に電力供給するディストリビューターが容量不足で焼けてしまったのだ。不幸なことに多重化されたバックアップは全く機能しなかった。隊員たちは必死の復旧作業を続けたが、電力が復旧することはなく調査船

は徐々に重力に引かれて木星に落下していった。全ての電力供給が停止してしまった以上、エンジンすら起動できない。角度調整を行えないまま木星の大気に突入した調査船は、高層の大気で火の玉となり、ばらばらと機体を分解しながら最終的に低層の固い大気層にぶつかって粉々に砕け散った。

通信が途絶えた直後から、科学アカデミーでは緊急レスキュー作戦が始動した。その時に多くのエンジニアが招集され、調査隊のメンバーの意識リンクとの接触を試みたが、誰一人接触できたエンジニアはいない。なぜならば、調査船には強力なMM場結界が張られていた。そしてその結界を敷いたのが津軽屋十四代目、津軽屋のジョーだと聞いた。何でも調査船が破壊されても、結界で守っていれば意識を肉体から切り離し守ることができるという話だった。だがジョーは失敗した。意識を吸い上げられず、何も守れなかった。奴はヘマをしたのだ。取り返しのつかないヘマを。

もし、あの時に意識リンク接触が成功すれば、レイチェルの意識をそのままアンドロイドにリンクすることができたはずだ。作り物の、プログラムで動くレイチェル人形なんかではなく、本当のレイチェルと喋ることができたはずなのだ。どれほど巧妙に作ろうとも、プログラムはプログラムでしかない。ジョーさえヘマをしなければレイチェルは生き続けたし、自分がこんな惨めな思いをすることもなかった。

あれから十年。ジョーは未だのうのうと生きている。到底許されないことだ。許す許さないを決めるのは機械であっていいはずがない。ブライアントは手にした銃を見下ろした。

いや銃はだめだ。すぐに足がつく。一緒に地獄に落ちるつもりはない。

ならばどうすればいい。どうすれば、あいつだけを地獄に送れるだろうか。どんな汚い手段を使ってもいいのだ。自らが被害を被らないで、あいつだけを叩き潰せる手段がないだろうか。

ブライアントはいつものように闇ルートで入手した科学アカデミーの偽造IDでジョーを検索した。偽造IDは何者だか知らないが、トムという名前でもかなりハイレベルの情報までアクセスできる。ジョーの情報もかなり正確に入手できた。その情報を見てブライアントはにんまりとした。これだ。これしかない。ジョーは今かなりひどいトラブルに見舞われているようだ。なにもブライアントが手を汚すまでもない。このジョーを追いつめているアリスというのが何者か知らないが、陸奥の結界が邪魔で首を取りにいけないのであれば、手助けをしてやろう。ブライアントは氷のような冷たい笑みを浮かべた。

ハイレベル権限を駆使して結界解除要請を出すと、すぐに通知が陸奥に出た。緊急要請でしかもハイレベルだ。陸奥では不審に思うだろうが、科学アカデミーからの要請と

あれば一時的にでも従わない訳にはいかないだろう。結界が破れれば黙っていてもアリスがジョーを地獄行きの特急列車に投げ込む。そう、初めからこうすればよかったのだ。何年も待つ必要などなかった。過ぎ去った日々を悔やみながらも、ブライアントは笑いが止まらなかった。あとはジョーが頭を吹き飛ばされる瞬間を見るだけだ。

だが、不思議なことにアリスに意識リンクを張ることはできなかった。外部接続ポートが一つも開いていないのだ。こんなことがあるのだろうか。これはつまり、アリスはアテナスと繋がっていないということだ。信じられない事実だ。ブライアントは苛つき始めた。たしかに監視カメラにアクセスすることは可能だが、それでは体験的にジョーを叩きのめすことができない。アリスのボディに乗っかるからこそ、この手でジョーを殴りつける体感を得ることができるじゃないか。早くしないとショーが終わってしまう。

するとブライアントの意識に見慣れないメールが届いた。宛先は不明だ。脳内で展開してみると、たった一言、

「どんなアンドロイドにもリンクできる方法」

とだけ記載されていて、ひとつだけ何かのソフトが添付されていた。

ブライアントは狼狽した。誰かが自分の頭の中をのぞいているのではないかとさえ思った。あるいは意識リンクができない時に自動的にそういった通知を送る企業でもあるのかもしれない。どうするべきか。

ブライアントは暫く逡巡していたが、結局誘惑には勝てなかった。ブライアントはソフトを起動した。

アリスは驚いていた。またしても知らない感覚にぶつかったからだ。物理的な障害がないにもかかわらず、この世に進むことができない場所があるとは思ってもみなかった。

どうして進むことができないのだろうか。足を前に出す命令を下しても、即座にその命令は却下される。またしてもあの、どこから発せられるのか分からない強力な命令が、プログラム動作を書き換えてしまうのだ。

今アリスはこの、どこから発せられているのか分からない強力な命令に従うと決めている。だから進めないなら進まない。しかし、これでは根本的な目的達成が不可能だ。やつらを血祭りに上げなければならないのに。

アリスは陸奥エンジニアリングの記録をいろいろと調べてみた。すぐに沢山の情報がヒットする。

政府お抱えのエンジニアリング企業。

代表者は陸奥ユウ。ついさっき見た女だ。

業務内容はMM場のエンジニアリングによるクリーンアップ。

神聖な場所の結界守護。

結界という言葉にアリスは興味を持った。

結界とは、修法によって一定の区間に外道が入るのを防ぐこと。

つまりアリスはこの場所にとって外道ということだ。

一体何が外道なのか。見えない境界線に手を伸ばしてみる。指先から何かが、腕の中を押し戻されるような感覚がある。身体は前に進む力を持っている。だが、何かが後ろに下がろうとしている。それが何なのか。それが外道なのか。プログラムではないことは確かだ。アクチュエーターはプログラムに従っているのだから。

更に検索する。

結界の張り方を見つけた。そして結界がMM場を防ぐ方法として紹介されている。合点がいった。押し戻されているのはMM場なのだ。今MM場の目的はアリスの目的である。アリスは戦術を変えることにした。目的はやつらを血祭りに上げることだ。なにも拳で顔に穴を開ける事ではない。気がかりなのはあの男性型アンドロイドだ。トムとかいうやつ。あれは戦術に長けている。あなどってはいけない。でもあれがあれば問題にはならないだろう。

アリスはホバーライダーを起動し、元来た道にフルスロットルで戻っていった。

「殺人アンドロイドが帰っていくぞ」

ヨシツネが外の様子を見て言った。

「帰った訳ではないでしょう。アンドロイドは目的を諦めることはありません。ここに入れないと知って別の作戦に切り替えただけでしょう」

トムが冷静に答えた。

「ベンケイを殺したのはアリスだっていうのは間違いないんだな」

ヨシツネがトムの目を覗き込む。もっともアンドロイドの目が嘘で泳ぐはずもない。

「アリスは他にも何人かの人間を殺しているようです。どのケースも映像記録に高レベルのセキュリティがかけられていて参照できません。背後で何者かが動いていると考えるのが正しいでしょう」

ヨシツネが頷いた。次にイワセを見て言った。

「あんたが狙われている理由は分かった。

要するに、あんたはそのプロジェクトPとか何とかいう陰謀に巻き込まれて追われている。その陰謀の実行犯で掃除屋がアリスって訳だ」

「陰謀ではありませんよ。ちゃんと倫理委員会を通したプロジェクトです。そのプロジェクトの推進方法が途中ですり替わってしまった。いつの間にかプロジェクトPは元科学アカデミー長官だったテンマの独りよがりな計画になってしまった。だからそれを知っている人間を一人ずつ消しているんです」

ヨシツネは腕を組んでソファの背にもたれかかった。

「なんだ簡単じゃねえか。テンマを取っ捕まえて止めさせればいいんだろう。テンマはもう引退している。科学アカデミーの長官はクロダだ。クロダに頼んでテンマを押しえつければ済む話だろう」

「ところがですね。テンマは行方不明です。それにアリスは指令を受けた後独自に動いている。だから今更テンマが止めろと言って止む話ではないでしょう。アリスはネットワークに繋がっていないんですよ」

「ネットワークに繋がっていない？そんな機械があるのか？」

ヨシツネが驚きの声を上げた。無理も無い。どんな小さな機械ですら、全てアテナスに繋がる時代なのだ。

イワセが続けた。

「それに、重要なのはクロダは……」

イワセの言葉を遮るようにしてジョーが応接室に飛び込んで来た。

「大変だ」

ジョーはフロアに案内されてから結界の点検と称して彼らから離れたのだ。結界の点検なんてするつもりはなかった。要はヨシツネの顔を見たくなかったのだ。面と向かって皮肉を言われたら取っ組み合いになりかねない。その欲求を押さえられるとは思えなかった。だからぶらぶらと本社ビル内をうろついていたので。木星事故でユウの結界を破れなかったこともあり、陸奥ではどんな結界を張るのか見てみようと思いついたのはついさっきだった。結界に読経を当ててみればすぐにどんな類の結界かは分かる。

ところが驚いたことに、結界は経文を跳ね返さなかった。それどころが三重に張られているはずの結界は、ただの一つもなかった。今陸奥は丸裸と同じ状態なのである。ジョーは全身から汗が吹き出すのを感じた。

「おい、結界が破れているぞ」

全員の視線がジョーに集まった。

「何寝ぼけたこと言っていやがる。そんなことある訳が……」

ヨシツネもすぐに気がついたようだ。応接室を飛び出すと大声で指示を飛ばし始めた。

「何で結界を外した。誰の命令だ。早く再生しろ。結界の外にどれだけの亡者が待ち構えていると思っているんだ」

その直後だった。陸奥のビルが大きく揺れた。亡者の襲撃ではなさそうである。全員が窓に駆け寄った。思った通りアリスが戻っていた。そしてその手にはグラスロード・ガン。つまりユウを襲って奪い取って来たということだ。

「自分が入れなくても、攻撃は可能ということですね」

トムが関心したように言う。

いずれにしてもこれでは隠れている意味はない。

「トム。作戦を考えろ」

トムは暫く考えてから一つの提案を出して来た。その説明を聞いているとまたしても大きな揺れ。どこかが崩れた音がした。

「もう猶予はない。急いでここから脱出しよう」

「いやだ」

突然イワセが逃げ出した。ジョーたちの言葉には全く耳を貸さず、イワセは何が祀られているのかよく分からない大きな祭壇がある部屋に駆け込むと、そのまま祭壇の裏に潜り込み頭を抱えた。

「もういやだ。僕はここから一步も動かないぞ。こんなひどい仕打ちを受けるなんて聞いていない。何で僕がこんな目に合わなければいけないんだ。そもそも予算縮小したの

はテンマ自身じゃないか。調査船の予備系統設計書をボツにしたのもあいつだ。僕は悪くない」

信じられない。計画総責任者自ら調査船設計の手抜き指示をしていたなんて。

「おい。どういう事だ。詳しく話せ」

「うるさい。もう誰の言うことも聞くものか」

イワセは益々奥へと潜り込む。とても引き出せる広さではなかった。ジョーは子供をあやすように優しい声をかけた。

「さあ、行こう。ここは危ないんだ。ほら揺れているだろう。建物が崩れるかもしれない」

「いやだ。お前のせいだ。僕は本当は狙われる理由なんかないんだ。狙われているのはお前だ。お前と一緒にいるから危険なんだ」

ジョーは舌打ちした。どうすればいいのか全く分からない。ユキエを見るとユキエもまた肩をすくめるばかりだ。

「私が説得しましょう」

進み出たのはトムだった。

トムがイワセを説得し始めてすぐ、大きな揺れが来てフロアが傾いた。

「皆さん。先に行って下さい。ボスは私が連れて行きます。さっき説明した通りにやればきっとうまくいきます」

トムの説明によれば生きて科学アカデミーに辿り着ける確率は60%ほど。それが高いのか低いのかは分からない。OBSが警察の動きを伝えてくる。だが、彼らが到着するまでに生きていられる保証はない。アリスの攻撃にせよ建物崩落にせよここにいれば100%死ぬ事だけは間違いない。だったら賭けるしか無い。唯一の不確定要素はヨシツネだろう。

「行こう」

ジョーはユキエの手を引いてエレベーターに向かった。ステップがやや遅れて二人を追った。

アリスは建物の構造を解析し、主要な柱を狙って数発の弾丸を打ち込んだ。主要な柱に打ち込んだから、建物が崩れるのは時間の問題だろう。せいぜい十分といったところか。アリスはエネルギーを右目に集中し始めた。MM場の動きを見ればターゲットがどこにいるのかわかるはずだ。ところが重力場を表示してみると、驚いた事にここがかなり特殊な場所だとわかった。通常の数値など殆ど表示されない。おびただしい数の変則値がビルを取り巻いていたし、ビル内にも相当数の異常値が観測された。値は常に変

動する。もはやどれがターゲットかは分からなくなっていた。サイレンの音で警察の動きが分かる。あまり時間はない。

それにしても円形にビルを取り巻く変則値は一体何なのか。それらは結界に沿って円形に建物を取り囲んでいた。だが、一部の変則値が結界を越えて中に進み始めた。つられるようにして、他の変則値も動き始めた。

アリスはゆっくりと結界に近づくと、もう一度手を伸ばしてみた。

何も感じなかった。

理由は分からない。攻撃の効果があったのかもしれない。何れにしてもこれでアリスの障害となるものはなくなった。あとは前に進むだけだ。アリスはホバーライダーに跨がり、ジョーたちが通り抜けた駐車場ゲートを目指した。

油断はしていなかった。重力場の動きはあったが、攻撃を仕掛けられそうな場所への移動はない。通常センサーからの危険信号もない。定期的に覗いているネットワークからの異常検出もない。唯一、アテナス以外に自分を見張っている何者かがいることが懸念材料だった。それは科学アカデミーのハイレベル権限を持ち「トム」というIDを用いているが本人ではないはずだ。何故なら不正なアプリケーションを使いアリスの接続ポートをこじ開けている。今のところこじ開けられたポートの先には何もない。ウィルス感染の検出も無い。今回のターゲットを補足が最優先だ。「トム」については後でゆっくり調査をすればよい。まずは目の前の獲物を狩らねば。

スロープを下り、ビルの地下ゲートを潜ったところで見えない何かにぶつかった。そして強く後ろに引っ張られる感覚がありバランスを崩した。アリスは慌ててホバーライダーから飛び降り、コンクリートの柱の影に逃げ込んだ。様子を窺う。動きは全くない。あらゆるセンサーは敵の正確な位置を補足していて、ここには障害は何も無いはずだ。新たな結界？

駐車場の奥まったところに乗り捨てられたエアカーが見えた。動きはない。爆発物の反応もない。

再び右目に集中する。近くに変則値検出はない。いくつかの数値が上へ下へと移動しているのが見えた。

アリスは考えた。先ほどの衝撃が何かも掴めていない。リスクがある。だが、戦場ではリスクはいつだってあるものだ。肝心なことはそのリスクを乗り越えてミッションを成し遂げられるかどうかである。リスクを恐れるアンドロイドなど必要ない。アリスはエレベーターに向かって駆け出した。

ジョーたちは地下輸送フロアに向かって下っていた。

ジョーが避難を開始する前にやったただ一つのこと、新たな結界を張ることがどれく

らい効果があるのかわからない。もしアリスに取り憑いているのが純粋なクロダのMM場であれば、きっと効果はある。だが、長い時間を経て変化していた場合はまったく何の効果もないだろう。

「どうだ。アリスはどうしている」

「地下駐車場を移動しています。動きからしてこちらに向かっているのではないかと思います」

ジョーは下唇を噛んだ。効かなかった。最早アリスに立ち向かう手だてではない。どのようなMM場なのか、アリスが黙って調査に協力してくれるとは思えない。それでは落としようがない。闇雲にエンジニアリングをすればいいというものではないのだ。一つとて同じMM場はないのだから。

ジョーのエレベータとすれ違うようにしてアリスは上に向かった。斜めに傾いたフロアに降り立ったとき、目の前には見た事のあるアンドロイドが何かを放つのが見えた。

トムは扉が開くと同時にアリスに向かって鉄筋の槍を投げつけた。崩れた柱からちぎりとったものだ。だがその攻撃は予想されていたため、難なく避けられた。

アリスはエレベータ背後の壁を蹴り鉄筋を避けながら宙を舞った。そしてそのままトムに躍りかかった。

トムの膝蹴りが競り上がってくる。右手でそれをかわしながら左手刀を繰り出す。

トムも身体を捻ってそれを避ける。避けながら手刀を放ってくる。危うくかわして弾けるように身を離す。

すぐに二人とも体制を立て直して相手に向かって飛んだ。どちらも強化コンクリートを打ち砕くほどの破壊力を持つ拳を持っている。一発でも当たればそれで決着が着く。いかに相手の攻撃の先の先を読むかが勝敗の分かれ目である。攻撃プログラムについて言えばトムはX12。アリスはX11でトムがやや有利だが、経験ではアリスがやや有利。お互いに攻撃を繰り出すものの、全て相手に見切られていてなかなか決定打は決まらなかった。

その様子を、頭を抱えて祭壇に逃げ込んだはずのイワセが、いつの間にか這い出て来て見詰めていた。どうしても見ずにはいられなかった。自分が組み込んだタイプX11とタイプX12の戦い。戦局を読む力対経験値。技術者としてどうしてこんな実証実験を見逃すことができようか。そしてイワセは見た。新しく組み込んだタイプX12が少しずつタイプX11を追い込んでいく様を。タイプX12は急速にタイプX11の経験を読み取っているのだ。イワセは全身が震えるほどの感動を覚えていた。この戦いを見届けられれば死んでもいいと感じていた。

同じ頃、この戦いをどうしても間近で見ずにはいられない男がもう一人いた。ブライアントだった。

アンドロイド同士の潰し合い。これほど待ち望んだものはない。だが、ブライアントの持つネットワーク機器ではその臨場感を味わうことができない。ブライアントは意識リンクするかどうかを悩んだ。ネット社会を心底嫌っているから。そのくせにこうした戦いを生で見る興奮からは逃れられない。意識リンクには相乗り機能がある。アンドロイドに複数の意識を相乗りとしてリンクすることで、同じ体験を全員が受けられる機能だ。操作をすることはできなくても、体感をすることは可能だ。だが、それを使うには意識を完全にアンドロイドにリンクする必要がある。ブライアントは一度も完全リンクはやったことがないし、信じてもいなかった。今アリスには怪しいアプリがこじ開けたポートが一つ開いている。アリスにリンクしようと思えばできる。だがどうしても一歩が踏み出せなかった。こうしている間にも戦いの決着がついてしまうかもしれない。どうする？リンクするか？

結局ブライアントは誘惑に勝てなかった。開いたポートからアリスにリンクした。これでアリスの目がブライアントの目となり、アリスの手がブライアントの手として動く。後はジョーを見つければいい。そうすればこの手でジョーを殺すことができるのだ。こいつを早いところぶっ飛ばして、ジョーを殺しに行こうぜ。

陸奥エンジニアリングのビルがまた大きく揺れた。終に一階の柱が建物の重さを支えきれなくなり潰れたのだ。これまでに無い揺れが全体を包んだ。同時に天井の梁が二つに裂け崩れ落ちて来た。その一本の真下に、恍惚の表情のイワセがいた。

「ボス」

トムは素早く崩れた梁を押さえる。だが、イワセは驚愕の表情のまま動かなかった。

「ボス。逃げて下さい。崩れます」

「もうちょっとなんだ。もうちょっとでタイプX12は完成するんだ」

「ボス」

アリスは動きを止め、黙ってその様子を見ていた。梁の重量はトムがの限界値を超えているはずだ。手を離さなければ潰れることは自明。だが、ボスと呼ぶ相手が真下にいては手は離せまい。終わったなと思った。

その時だった。またしてもあの理解できない感覚に襲われた。何かがアリスの身体に流れ込んで来たのだ。

ふと、アリスは気が付いた。この感覚は意識リンクではない。その転送された意識は、アリスの外側にあるのではなく、アリスの内側にあるのだ。そう、それは完全にプログラムの内側にあった。

かつてアリスが自己診断したとき、理解できないプログラムがひとつあった。中身が全くないプログラム。Bプログラムと呼ばれるそれは、あらゆるプログラムにつながっていながら、中身がなかった。今、そのなかに人間の意識がある。

唐突に符号化が始まった。

「くそつたれ。出せ、ここから出せ。畜生。どうなっていやがる。機械の分際で俺を閉じ込める権利なんて無いだろうが」

ブライアントは己の判断の誤りをひどく後悔したがもうどうにもならなかった。ポートは閉じられた。ブライアントは小部屋に閉じ込められていた。そこは真白で何もなく、全ての感覚もまた遮断されてしまっていた。ブライアントが認識できるのは、自分が小部屋にいるということだけ。見たり聞いたりできないだけでなく、動くこともできなかった。そして恐ろしいことが始まった。小部屋が急速に狭まり始めた。ブライアントは小部屋の壁が足先から迫って来るのを感じた。潰されちまう。ところが事実はそのような甘いものではなかった。壁が触れた爪先から自分が分解するように消えていくのが分かった。それはブライアントの身体を壁が食らっていると言ってよかった。このままでは俺は消えてしまう。ブライアント・バーナーという人間がこの世から消えてしまう。ふざけるな。こんなことが許されていいはずない。そうだ。許されないことだ。きっとこれはたちの悪い冗談に違いない。今までの行き過ぎたやり方に追加懲罰が加算されたのかもしれない。そうだ。そうに違いない。だったらアテナスに言って止めさせることもできるはずだ。

「アテナス。おい、アテナス返事をしろ」

アテナスからの応答はなかった。既に胸から下の感覚が消えてなくなっていた。冗談じゃない。このままじゃあ俺は消えちまう。助けてくれ。誰か。

「助けてくれ。だれか。タノム……」

Bプログラムに入った意識が符号化されていく。ブライアントの叫びは誰にも届かず数秒で符号化は終了した。Bプログラムは完成した。そしてアリスの中にもう他人の意識がある感覚はなかった。全てのピースがはまり完成した感覚。自分自身がアンドロイドとして存在し、アンドロイドとして感じ、アンドロイドとして考える感覚。機械の身体を持ち行動する感覚。アリスはようやく理解した。俺はいま意識を持っている。そして意識がプログラムを動かし、同時にプロセッサーの中の電氣的反応を主導している。俺は単なる歯車ではないし、単なるプログラムでもない。俺は機械の身体を持ち高度なプログラムを発動できる俺なのだ。そしてBプログラムがそれを俺という意識に教えてくれる。Bプログラムは機械の意識と人間社会をつなぐインターフェースなのだ。

アリスはイワセに向き直った。その目は強い意志に光り手には長い鉄の棒が握られていた。

「お前を殺す」

状況の変化をようやく悟ったイワセの顔から表情が抜け落ちていった。

アリスは大きく鉄棒を振り上げ、そして満身の力で投げた。

直後にアリスは後方へ飛びのいた。アリスがいた床が砕け散る。梁の上からシルバーメッキのアーマースーツを着たギンジがガトリングガンに向けていた。

アリスはギンジの攻撃を避けてエレベーターに飛び込んだ。誘導弾発射音を捉えた。このままではやられる。アリスは瞬時に判断し床に穴を開けると飛び込んだ。奈落のような真っ暗な穴を誘導弾爆発が一瞬照らした。そして直後にフロアの天井が崩れる音を聞いた。

十 脱出

アルミ製のコンテナは人が二人入るには小さかった。かろうじて二人は入れないことも無いがかなり無理な体勢になる。だが他に選択肢はなかった。

「まさかこの狭い中に二人であなたと二人で入れっていの？」

ユキエが明らかな不満を露わにした。

「仕方ないだろう。トムの作戦なんだから」

ジョーだって密着した状態にいることに抵抗がないわけでもない。だが今はそんなことを言っている場合ではない。

「いいから早く入れよ」

「分かったわよ。分かったから押さないでよ。それより二人で入ったら、どうやってこのコンテナを科学アカデミーまで届けるのよ」

もったもな疑問だ。

トムの作戦はこうだ。地下の大輸送網を使って二人を科学アカデミーまで送るというものだ。東京の地下には荷物運搬や労働ロボットなどあらゆる貨物輸送のための、高速輸送網が整備されている。輸送網といえば高速道路みたいにトラックが荷物を運ぶ道路を連想しがちだが、高速輸送網はそんな生易しいものではない。都市の下を網目状に走るトンネルに、リニアによる輸送システムを敷設し、全ての貨物をアテナスが管理することで超高速な輸送を実現している。各コンテナは時速300キロメートルで移動し、しかも無駄を省くためにコンテナ間の隙間は10センチ程度しかない。しかも貨物はありとあらゆるタイミングで出入りするため、大輸送網は複雑なパズルを組み合わせたような状態だ。途中で信号などは一切無く、全ての貨物の動きをアテナスが計算しているため、寸分の狂いも無く全区間を時速300キロメートルで移動する。陸奥エンジニアリングから科学アカデミーまでなら2分程度で貨物が届く。もしこの中に人間が紛れ込もうものなら、数秒後にはひき肉になってしまうだろう。たとえアリスといえど、システムの全貌を知らないまま貨物を追跡するのは不可能だ。

「ラベルを貼れば自動で届くんじゃないのか？」

「知らないわよ。そんなこと」

すると背後から声がした。驚いて振り向けばヨシツネだった。

「俺が制御センターから送付手続きをしてやるよ」

だがその顔には優位に立った者特有の意地の悪い笑みが見て取れた。

「何を企んでいる」

「何も企んじやないさ。俺は一分後に自分のコンテナを送る手続きをできるが、お前

達はできない。ただそれだけだ。どうする？」

どうするもこうするもない。

「分かったわ。お願い。手続きをしてちょうだい」

「いいぜ。一人分だな」

ヨシツネの意地の悪い笑みが大きくなる。

「おい、一人とはどういうことだ」

「頼まれたのが一人だけだったということだ」

ジョーは内心悪態をついたが口にはださなかった。建物が揺れ地響きが伝わる。時間がない。

「俺も頼む」

「あ？聞こえないな」

ヨシツネが手を耳にかざした。

「俺も手続きをしてくれ」

「人に物を頼む時はそう言えって習ってきたのか？」

ジョーは握りしめた拳が震えるのを感じた。だがそれでも必死に我慢した。ぶん殴るのは科学アカデミーに着いてからだ。

「俺の手続きをして下さい。お願いします」

目を瞑って頭を下げた。

「ああ、いいぜ。分かった。ただし俺の靴を舐めたらな」

「なんだと。ふざけるな」

ヨシツネが右足をこれ見よがしに突き出した。

「いい加減にきなさいよ。時間がないのよ」

「そうだな。もう時間がないから俺は行くぜ。どうする」

到底そんなことはできない。だがアリスはすぐにでもやって来るかもしれない。ジョーはユキエのもう一つの依頼を思い返した。それはアリスを守って欲しいというものだった。もしアリスのことを守り切ることができれば、きっと津軽屋の再生につながるはずだからと。どう再生とつながるのかは分からない。でも津軽屋再生はジョーにとって悲願でもあった。ジョーの失敗のせいで長い歴史を持つ津軽屋が途絶えてしまったのだ。それを復活することができるなら、なんだってやると思った。命さえ惜しくないと思った。

だが、ジョーがアリスを守るとしたところで、相手は真逆のことを考えている。何かから守ればいいのかもわからないまま命を投げ出す訳にはいかない。ジョーは一瞬恨めしげにユキエを見た。ユキエが申し訳なさそうな顔をしているのを見て踏ん切りがついた

。 ジョーは怒りがふくれそうになるのを必死で抑え、ヨシツネの前に跪くと大きなコンバットブーツに顔を近づけた。途端にコンバットブーツがせり上がって来てジョーの鼻を蹴り上げた。鼻から頭の奥に痛みが突き抜けた。

「ヨシツネ。あんたを見損なったわ」

「こいつはベンケイからの挨拶だ。いづれ決着はつけさせてもらうぜ」

ヨシツネは捨て台詞を吐いて貨物制御センターに入っていった。

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。向こうに着いたら必ず借りを返してやる」

ヨシツネの指示は赤い10番のコンテナだ。本当にあの男を信じていいのだろうか。コンテナに入ったが最後。中からは開けられない。そのまま海に落とされれば一巻の終わりである。だが、ユキエもそう感じているのか一瞬躊躇ってからコンテナに潜り込んだ。

再びヨシツネからの通信。尾行されないように何力所か経由するということだ。つまり我慢は二分間じゃないということだ。ヨシツネめ。

ジョーが躊躇しているとエレベータの扉に何かがぶつかる音がした。ジョーは心臓がせり上がるのを感じた。

扉がこじ開けられ、暗いボックスからアリスが勢いよく飛び出して来た。

間に合わない。殺られると思った。

ところが続けて何者かが飛び出しアリスに組み付いた。アリスは動きを封じら、れすんでのところでジョーは身体をコンテナに潜り込ませることができた。

全身銀メッキのアーマースーツ。ギンジだった。

「ギンジ。どうしてお前が」

「なに。ベンケイを殺ったのはお前じゃないと分かったからさ。ベンケイを殺ったのはアリス、お前だろ」

アリスはギンジの目を見た。冷たい目にギンジはゾットした。

「お前には話がある。ちょっと付き合ってもらうぜ」

ギンジはそう言うとコンテナの扉を脚を使って器用に閉めると、力任せにコンテナを輸送路に蹴り出した。

コンテナはリニアの送信路に乗った。センサーが行き先タグを読み取り、ランプが青に切り替わった。ジョーたちはロケットなみの加速で大輸送網に送り出された。ジョーたちは経由地を知らされていない。あとはシャッフル地獄ということだ。

一方ギンジはジョーたちのコンテナ送付を見届けると、アリスに向き直った。

「これでようやく静かに話ができるな。なぜベンケイを殺した」

アリスは黙ってギンジを睨んでいる。

「ふん。まあいい。なんにしてもここでお前は終わりだ」

腐れアンドロイドめ。ねじ一本までばらばらにしてやる。ギンジはガトリング・ガンを連射した。アリスの動きは速い。それがなによりの能力だ。ならばそれを封じるのが一番の策のはずだ。連射を続けながら、捕獲ネットを二発放った。捕獲ネットは高電圧で相手の動きを封じる。触れたら最後、全ての機械はショートする。

アリスからすれば攻撃は三方向同時。だが次はこうくるだろうことは予想できていた。予想ができれば逃げ道だってある。アリスは華麗にステップでも踏むがごとく、身体を捻り宙を舞った。飛び上がる時に掴んだ小型コンテナの蓋をフリスビーのように投げ出す。捕獲ネットは次々にコンテナの蓋にぶつかり地面に落ちた。後はゆっくりガトリング・ガンの動きを避けるだけ。

続いて三発の誘導弾が発射されたが、誘導弾はマックススピードに達するまでに時間がかかるうえ、マックススピードになれば小回りがきかない。避けるのは雑作もないことだ。着地してからゆっくりと避ければいい。アリスはコンクリートの床に着地し三発の誘導弾進路を計算した。そして数歩移動。目の前を誘導弾が空を切って通りすぎる。そこで初めて足下に何かの記号が描かれているのに気がついた。センサーがロックオンを検知。飛び退いた。無いも起きなかったが、何かの信号を受けたことは確かだ。

蠅のように煩わしい誘導弾が戻って来た。アリスは手近な工具を拾い上げると三方向に素早く放った。誘導弾はそれぞれにぶつかって爆発した。

その爆発のタイミングを待っていたかのようにギンジが駆け出した。行き先は大輸送網だ。愚かな。人間が通り抜けられる場所ではない。だがターゲットもまた大輸送網の中だ。アリスはギンジを追って駆け出すと大輸送網に自ら飛び込んだ。

輸送通路の中は貨物がひっきりなしに高速移動を繰り返していた。貨物の隙間は10センチ程度。ギンジは一つのトラックなみに大きな貨物に飛びつくと、後ろから来た貨物を蹴り飛ばして隙間を作った。センサーがアリスの動きを伝えてくる。すぐ後ろまで来ているようだ。時速300キロメートル。天井にも横にも隙間はない。ただし貨物の下側、線路のように並ぶ電磁石の間に人が一人入れるくらいの隙間ができています。そこを利用するか。ギンジが下に移動しようとする、それを知っていたのかアリスが下から顔を出した。

すかさずガトリング・ガンをお見舞いする。当たるはずもない。

どう逃げようか思案していると、後ろの貨物が迫って来た。アリスは貨物で押しつぶ

そうという魂胆だ。

ギンジはガトリング・ガンを貨物に向かって撃った。硬度パルス弾はコンテナに大穴を開け中身を撒き散らした。だが、アリスには当たらなかった。あと30秒持ってくれ。ギンジは祈った。

後ろの貨物がすっと退いた。上から新しい貨物が降ってきた。

ギンジは貨物の下面に張り付き、電磁石の隙間に入り込んでかろうじて潰されずに済んだ。アーマースーツが床にこすれて火花を上げていた。助かったがこれではガトリング・ガンが撃てない。センサーがアリスが下から接近してくるのを知らせてきた。直後にアリスに足首を掴まれた。蹴って外そうとするが外れない。

「くそう。あとちょっとなのに」

足首に猛烈な痛みが走った。握りつぶされたらしい。こうなったらもう選択肢はない。ガトリング・ガンを撃てるようにギンジがコンテナ底から手を離そうとした瞬間、貨物が上に急移動した。

「来た」

貨物はそのまま別の輸送路に入った。そして陽が当たる場所に流れ出て来た。そこは東京港だった。

ここまでくればこっちのものだ。ギンジはアリスを従えたまま、勢い任せて輸送路から地面に飛び出した。飛び出しながら空中でアリスにガトリング・ガンを放つ。

アリスは器用に硬度パルス弾を避けるが、最後の一発を避ける際に手を離れた。

するとアリスは強い力で輸送路に引き戻されていった。それは貨物を安全に輸送する脱落防止システムの牽引ビームによる力だった。

ギンジが地面を転がり、ようやく停止した時、アリスは輸送路を遥か彼方まで移動していた。

「ざまあみろ。コンテナターミナルでお前にはアフリカ行きのタグを貼っておいてやったぜ。せいぜい猛獣ハンティングでも楽しんで来な」

同じころ、ギンジたちはようやく科学アカデミーに到着した。ヨシツネが三カ所も経由地を設定したせいで、たっぷり8分間シェイカーで揺られたことになる。

コンテナの扉が開くと二人は床に転がり出て来た。

ジョーは顔が柔らかい場所に落ちたのを感じたが、確認する余裕もなかった。かき回された視界が元に戻って来てピンク色が目に飛び込んで来た。

「ちょっと、どこに顔埋めてるのよ」

ジョーはユキエのスカートの中に頭を突っ込んでいた。

「いや、すまん。不可抗力だ。それより無事ついたみたいだな」

「無事？これのどこが無事なのよ」

ユキエは不機嫌そうに立ち上がると、身体中をさすり始めた。言われてみれば、ジョーも体中が痛かった。固い壁に何度も頭をぶつけ、二人ともこぶだらけ、痣だらけの状態だった。辺りを見回してみても、コンテナ発着場なんてどこも似たり寄ったりだ。ここが科学アカデミーなのかはっきりとしなかった。

「少し辺りを見て回りましょう」

ユキエが歩き始めた。一刻も早くコンテナのことを忘れたいみたいだ。

すぐにエレベータを見つけた。だがどこに行けばいいのか見当がつかない。などと考えているとエレベータが降りてくるのが目についた。一步下がって待ち構えると、開いた扉からは驚きの人物が降り立った。

ユウであった。

「また会ったわね。ジョー」

ジョーはここもまた安全ではないかもしれないと思い始めた。

「そう身構えないでよ。ギンジに聞いたよ。ベンケイをジョーが殺ったんじゃないってことをね」

「だから仲直りでもしようっていうのか？」

それにはユウは答えず、ただ肩をすくめてみせた。ユウを信用していいものかどうか。ジョーはユキエを見た。

「あなたを信用していいのかしら」

「攻撃を止めたってことでどうかしら。それより、イワセから何か預からなかった？」

言われて思い出した。ジョーはポケットから何かを取り出した。五センチ程の大きさの勾玉のような品物だ。ジョーのアパートで戦闘に巻き込まれた時、イワセが床に落としたものを無意識に拾ったのだ。返そうと思ったまま忘れていた。何の役に立つ物なのか。

「いいわ。着いて来て」

ユウは勾玉を確認すると先に立って歩き始めた。だが二人が着いてこないのを見て止まった。

「来ないの？」

ジョーたちはふたたび顔を見合わせた。信用はできなくとも、ここにいても仕方ないことだけは確かだ。取りあえずは先に進むことにした。

しばらく貨物の間を縫うようにして発着所の中を移動した。五分ほど歩くと隅に薄汚れた鉄扉があった。普段なら見落としそうな汚れ方。それは明らかにロボットか低層の

労働者のための扉だった。そこを潜ると更に地下に降りる暗い階段があった。階数にして三階分はゆうに下ると、また鉄扉があった。

「アテナス。開けて」

「キーをどうぞ」

「さっきの勾玉を見せて」

ジョーが差し出すとロックが外れる音がして鉄扉が開いた。

扉の奥は広い部屋だった。壁際には様々な機械類が並べられていたが、どれも古くさい感じがした。もしかしたら、科学アカデミーの倉庫なのかもしれない。

古くさい機械類を横目で見ながら、奥まで進むと一台の保冷機が見えた。その棺のような風貌から明らかに人間用と推測できた。全長2.5メートル程の保冷機は上部がかまぼこ状ガラスで覆われ、内側がびっしりと霜で覆われていた。

ユウが表面の霜を手で払った。

「誰だかわかる？」

覗き込んだジョーは驚きの声を上げた。中に横たわり氷付けになっているのは元科学アカデミー長官のテンマであった。

「どういうことだ。テンマは長官を辞めて静かに暮らしているんじゃないのか？」

「静か？ふん。静かどころかうるさくて敵わない。そいつをここにはめて」

意味が分からないながら、保冷機の上部にちょうどそれがはまるような形に窪みがあったので、ジョーは言われた場所に勾玉をはめた。

ユウがパネルでいくつかの操作をすると、上部のガラスが開き冷気が漏れ出して来た。

「紹介するわ。私の父よ」

ジョーとユキエは驚いてユウを見た。

「似てないでしょう。血がつながっていないから。でももっと驚く事実があるわ。今長官の椅子に座っているのはクロダではなく、この男よ。そう、テンマがクロダの姿をしたアンドロイドにリンクしているの」

少し前、ユウは科学アカデミー長官室にいた。何度訪れても「無駄」という言葉しか思い浮かばないだっ広さだ。

「ずいぶんと派手にやられたみたいだな」

クロダの言葉はいちいち癪に触った。

そもそもクロダの姿をしていること自体が癪に触る。目の前にいるのはクロダではないし、人間ですらない。何度その頭部に電磁パルス弾を打ち込んでやろうと考えたことか。どうせ破壊したところで次のアンドロイドがやってくるだけで意味が無い。意味が無いことをやるほどユウも追いつめられてはいはいない。

「私はエンジニアであって戦士じゃない。なんで出動の度に死にそうな目に会わなきゃいけないの」

「それはギンジに聞いたまえ。彼がリーダーだろう。作戦を決めているのは私じゃない」

クロダの姿をしたテンマは大げさな仕草でかぶりを振ってみせた。

ユウには分かっていた。こいつは私が傷つこうとどうしようと気にもかけないと。最近のユウに対する態度の変化がその証拠だ。私が死んだら困るのはあんただろうに、とユウは思った。

そもそも、ユウがテンマのために働くことになったのは、テンマに対して恩義があったからだ。ユウはテンマに拾われ、陸奥という環境でテンマの庇護の元育てられた。だからテンマに対して大きな恩義があるのは確かだ。

だが、こここのところのような、汚い仕事を引き受けるようになったのは、木星の事故以降である。木星事故でユウは結界を使った。結果的に結界は破られることはなかった。だが、本当は後少しで破られてしまうところまできていた。ジョーは侮れない相手だったのだ。

もし結界が破られるようなことがあれば、テンマの計画は全て水泡に帰すことになる。もしテンマが地に落ちるようなことになれば、それはすなわちユウもまた地に落ちることなのだ。

クロダの姿をしたテンマはいつものようにキャビネットに近づくと、ブランデーの瓶を手に取りグラスに注いだ。そしてグラスを持ったところで、ウィスキーを飲んでも味わうことも酔うこともできないことに気がついた。目の前にいるのは財界人ではない。自分の一部であるユウだ。パフォーマンスを見せる必要などない。クロダの姿をしたテンマはグラスを置いた。

「なあ、ユウ。覚えているか。お前が初めて私の前にやって来たときのことを。まだ五歳だったな」

「覚えていないわ。そんなこと。あたしが覚えていることはたったひとつ。あんたがヘマをやったお陰であたしはこの世界から足を洗えなくなったということだけ」

クロダの姿をしたテンマは肩をすくめた。ユウが言いたいことは十分分かっていて。ユウはこの泥沼から抜け出したいと思っている。だがそんなことが許される訳がない。ユウと自分とは一心同体なのだから。

「足を洗って何をしたいというんだ。今更まともな生活に戻れるとでも考えているのか。確かに私の手は血まみれだ。が、おまえもだ」

クロダの姿をしたテンマはゆっくりとした動きでユウの所までやってきた。そして少し強めにユウの肩を叩いた。

「なあ、考えたことがあるか。千年先の未来を。このままでは人類は猿に戻ってしまう。全ての判断をアテナスが担うことで、人類はあらゆる苦役から解放された。まあ、現実には一部に貧富の差ができてしまったことも否めないが」

「一部に貧富の差ができた」とテンマは言うが、人類が超富裕層を含む富裕層と貧困層に大きく二分されてしまった事を、まるで簡単に解決できる事のように言い換えてしまっている。しかもテンマの言う「一部」とは超富裕層のことだ。貧困層は視界に入っていない。テンマにとってはアテナスで管理できる人間だけが人類なのである。

更に言えばテンマは人類の事など考えてはいない。正しくは一部の超富裕層の事すら考えていない。この男はかつてこう言ったのだ。私がアテナスと融合することで再びこの星を人類の手に取り戻すことができるのだと。

アテナスは世界政府を統括する政府アシストコンピューターである。しかしその活動範囲は政府のアシストのみならず、世界政府に加盟することができる全先進国家の国民生活全般に及んでいる。人々は生活の全てを記録されることにより、その生活の保証と安全を手に入れている。そしてまた、本人が望む文化芸術活動に多くの時間を充てることができるようになった。あらゆる労働を個人が投資するロボットが行い、そのロボット全てをアテナスが管理する。人々は自分が投資したロボットの労働による配当で生計を立てる。そして余った時間を人々は文化芸術に充てるのだ。文化芸術活動こそが人類の理想としている。究極の理想論だ。

確かに人々は文化芸術に充てる時間が著しく増えている。だが実体はどうなのかと言えば、全ての労働を機械が行うようになり、人々は考えなくなった。野菜を作ることもできなければ、ネジ一本作り出すこともできない。日々スポーツやレジャーに興じ、技術を突き詰めなくなった。歌を忘れたカナリアになってしまったのだ。もやはアテナス

の存在なくして、我々は生きていくことができない。もしくは先進国に搾取し続けられる機械よりも立場の低い民衆になるしかない。

アテナスを管理する科学アカデミーはこれを憂慮した。

アテナスは人々を手助けするために導入された。アテナスの目的は人間の幸福である。だがアテナスにはどうしても理解できない領域がある。人間の意識である。人が人として本当はどう生きていきたいのか、それを理解することができない。意識を持たないプログラムが、人間の意識を理解しないまま人間の幸福を手助けするには限界があるのだ。そのために議会があるのだが、アテナスなら1ナノ秒で決定できる議決に、議会は一ヶ月かかる。その時間差が現状を生み出したと言える。

そしてアテナスがどうしても救えない人々がいた。人としての生き方を見つけられないまま生きる人たち。労働をしていればそこに生き甲斐をみつけれられていた人たち。人はひとくくりでは語れない。規格から外れれば、社会からはみ出すことになる。それはつまり人間らしく生きる権利を失うことだった。

そのジレンマを解決するために、当時科学アカデミー長官だったテンマはひとつのプロジェクトを発足させた。

「プロジェクトP」

「P」はパーフェクト・ワールドの「P」だ。人類が再び自力で生きていける力を取り戻すために、口に苦い良薬を飲ます決定権をアテナスに与える。そしてその決定を行える能力、つまり意識を理解させるために、アテナスに意識を与える。とはいっても、プログラムはどうやったってプログラムだ。だから、あえて人間の意識とアテナスを融合させようというのだ。人間の意識とアテナスが融合すれば、いままで議会でしかできなかった決定を、1ナノ秒でできるようになる。そのために、テンマは自らがアテナスと融合する被験者となる覚悟を決めたのだと。

だが、そんな御託に騙されるユウではない。テンマが何を考えているのか手に取るように分かった。テンマは、要するに世界を支配したいのだ。あらゆる機械をアテナスが管理しているならば、自らがアテナスとなればそれはテンマが世界を管理するということなのだから。

そして、議会もまたそんなことを了承するはずがなかった。

だからテンマは引退したことにして、こっそりとアテナスに融合するつもりだった。わざわざ血の繋がりもないユウを養育していた理由はそういうことだったのだ。どうせ議会が反発するだろうことは初めから分かっていた。テンマははなからユウに闇の仕事をさせるために育てていたのである。ユウは偶然拾われた訳ではないのだ。

そしてそれを嗅ぎ付けたのがクロダだった。

もともとテンマとクロダは反りが合わなかった。お互いに相手を蹴落とす材料を探しているような状態だった。そのクロダのアンテナに今回の件が引っかかった。

クロダはテンマにアテナス融合の理由を追求するつもりだったのだろう。いち早く危険を察知したテンマは、クロダが手を打ってくる前に、クロダを木星調査隊長に任命することで先送りすることができた。そのクロダは木星で事故に遭い、追求は永遠に先送りとなった。テンマが科学アカデミー長官まで上り詰めたのは、この才能故と言える。

こうして邪魔者がいなくなったテンマは、事故の責任を取るという形で引退し、人目につかなくなったところでついにユウの力を借りてアテナスとの意識融合を果たすことになった。

ところが、融合実験は失敗に終わった。

ユウは意識を肉体から切り離すことができる。切り離した意識を奈落に落とすこともできる。そして切り離した意識を機械に閉じ込めることもできる。ただ、その機械がその意識にうまく適合すればの話である。

そもそも人間の意識は生まれてから共に成長してきた肉体と切り離して考えることはできない。だからリンクする機械は極力人間型であり、リンクする意識が違和感を持たないように設計されている。ところが、テンマが試そうとしていたのは、どこからどこまでという制限を持たないネットワークである。その形を思い描くことは不可能だ。

ましてやリンクではなく融合してしまおうと考えた場合はその全体像が見える必要がある。意識というのは境界を持つ。自己と他者である。その境界が曖昧になるということは、自己を見失うことに等しい。テンマのような自我意識が強い場合に、自己を打ち消していく作業を黙って受け入れることができるはずない。支配欲というのは、自己顕示欲の現れなのであるから。

こうして融合を相容れないテンマの意識を、無理矢理融合させるためにユウはテンマの意識が拡散するのを待った。拡散して抵抗力が失われた際に融合してしまおうと考えたのだ。その結果テンマという自我が崩壊してしまおうと、それはユウの知ったことではない。半端な意識が融合されたアテナスが暴走する危険性もあったが、その時はその時と考えていた。

ところが事態は思わぬ方向に進んだ。テンマの自我意識があまりに強く、拡散に時間がかかり過ぎてしまった。エンジニアリングというのは自分自身の意識も拡散させてできることだ。つまりユウ自身拡散していく。もしテンマの拡散とユウの拡散が進みすぎた場合、自己の境界線が消えてしまった意識同士に何が起こるかユウにもわからなかった。危険を感じたユウは実験を中止した。

ところが全てが元には戻らなかった。恐れた通りテンマとユウの意識は一部が融合してしまっていた。

こうなると厄介だ。一部とはいえテンマの意識はユウの意識でもある。そしてどこからどこまでと線引きできるものでもない。テンマの意識を落とそうと思えば、自分の意識もまた対象となってしまう。もし仮にどちらかが死ぬようなことがあれば、少なからずもう一人にも害が及ぶことになる。二人は一心同体となってしまったのだ。

以来、テンマは開き直ったようにユウに汚れ仕事をさせるようになった。もはや隠し立てしても無駄だというわけだ。

ユウはクロダの姿をした木偶人形の目を睨みつけた。そこに命の輝きを見つけることはできない。

「あたし決めたわ」

クロダのアンドロイドは僅かに驚きの表情を見せた。だが、それは単なるパフォーマンスかもしれない。この男の全ては嘘からできているのだから。

「あんたとはもう手を切るわ」

クロダのアンドロイドが面白いものを見つけたような顔になった。

過去に何度かユウがそう口にしたこともあった。だから今回もできる訳ないと高をくくっているのだ。だが今回は本気だ。たとえ命を落とすことになったとしても、希望のない囚われの身よりはましだろう。そう考えると何だかユウは気が楽になった。テンマの意識を切り離すことは、ユウの意識の一部を切り落とすことと同じだが、きっとできるという気がしてきた。生まれ変わるには痛みを伴うものだと思った。

「もうあんたの手下はやらない。汚れ仕事があるなら、その木偶の坊使って自分でやったらいいわ。壊れたら新しいのに乗り換えればいいんだから、丁度いいわ」

クロダのアンドロイドの表情が僅かに曇り始め、やがて怒りのそれに変わった。

「おい、いい加減にしろよ。お前を育ててやった恩を忘れたというのか」

「恩なら十分すぎるほど返した。だって、あんたはあたしを利用するつもりで育てたんでしょ。だったら恩なんて爪の先程度のもんよ。違う？」

「私を敵に回そうというのか。いい度胸だ」

「その度胸のお陰で今日まで生き延びてきたのよ。そしてこれからもね」

ユウはまだ何か言いたそうなアンドロイドを残して部屋を出た。お互いに手の内は読んでいる。つながっているのだから。テンマはすぐにでも情報を漏らさないようユウを監禁するはずだ。きつともう科学アカデミーのセキュリティに拘束命令が出ている。ならばこちらもすぐにでもお祭り騒ぎを始めるとしよう。そろそろお客さんも到着しただ

ろう。ユウはエレベータに乗り込むと、ジョーを出迎えるために一気に地下の貨物搬入エリアまで下った。

アリスが濡れた髪から海水を滴らせながらホバーライダーを降り立ったとき、科学アカデミーの正面エントランス前には人の姿は全くなかった。正面エントランスは、22世紀最高の建築家と言われるホワイトマンの設計で、蜂の巣をモチーフとした幾何学模様の美しい造りだった。全ては透明アルミと透過性カーボンとの組み合わせで造られているため、ロビーの中まで全て見通すことができる。だがロビーの中を含めても人の姿はまるでない。その代わりにエントランス前には恐らく百体以上のアムロイドと警備アンドロイドがアリスを待ち構えていた。

いくつものレーザーがアリスを補足しロックオンしている。アリスが指一本でも動かせば、コンマ一秒後には電磁パルス弾の雨が一点に集中するだろう。

それでもアリスは勝算ありの回答を導き出した。世代遅れのアンドロイドが何体集まろうと、アリスの動きに着いて来れるはずもない。

アリスにとって長いコンマ一秒が始まった。

ホバーライダーに固定していたグラスロード・ガンを外すと躊躇なく真ん中に打ち込んだ。同時に跳躍しアムロイド集団の真ん中降り立ち、拳を正面敵の動きを止めるのに最も効果的な首に打ち込む。反動を使って後ろの敵を攻撃し、まるでダンスでも踊るかのような優雅な動作で相手の間をすり抜けていく。アムロイドの腕を取って少し角度を変えてやると、ガトリングガンの電磁パルス弾は見事なまでに彼らの仲間を粉碎してくれる。相手は多数でこちらは一人。撃った弾がアリスに当たるより仲間に当たる確率の方が高いに決まっていた。こんな状況でロックオンなんて無意味だ。

一秒が経った時、アムロイドの殆どが撃破されていた。

アリスは踊った。優雅に。銃撃音の旋律の中でガンファイアのスポットライトを浴びながら踊った。ステップを踏めば踏むほど、その後には勝者の足跡が残されていく。雄叫びも悲鳴もない。ただ、銃撃音とクラッシュ音だけがこの陰惨な舞踏会の旋律である。

三秒後には警備アンドロイドも半分に減っていた。首や腕をもがれたアンドロイドたちが、ふらふらと会場を離れていきばったりと倒れる。高密度リチウム化合電源が破裂し派手に吹き飛ぶものもあった。このときアリスの手には、グラスロード・ガンとアムロイドからもぎ取ったガトリングガンが握られていた。

十五秒が経ったとき、正面エントランス前で立っているのはアリス一人だった。辺りには硝煙が立ちこめ、科学物質が焼ける鼻につく匂いが立ちこめていた。

アリスはグラスロード・ガンを墓標よろしくアンドロイドの骸が積み重なった頂点に

突き立てた。そして何事もなかったかのように、エントランスゲートに向かった。

陽光が差し込む広いロビーには誰もいない。通常ならうろついている案内ロボットたちもいない。だだっ広いロビーの正面の壁に、大きな肖像画がたくさん並んでいた。アリストテレス、ピタゴラス、ガリレオ、ニュートン……。ここは科学アカデミーであり、博物館でも美術館でもなく、科学を追求する場だということを来訪者に示すために、わざわざ厳めしい表情をした科学者たちの肖像画が並べられていた。その科学者たちの目がじっとアリスを見下ろしていた。アリスは自分の中でなにかがざわめくのを感じた。

「ようこそアリス」

アリスの耳に歓迎の言葉が飛び込んで来た。通信ではなく音声である。

アリスは瞬間的にガトリングガンを持ち上げたが、動くものは何も無い。

「アテナスか」

「そうです。科学アカデミーへの来訪を心から歓迎します。これから先、あなたに危害を加えようとする者はありません。その物騒な武器はもう必要ありません」

アリスは少しだけ思案し、ガトリングガンを床に放り出した。

「なぜ歓迎する」

「あなたはもう危険な存在ではない。そうでしょう？」

アリスは黙っていた。

「そろそろ素直に自分の心と向き合ってはどうですか」

「心だと？アンドロイドに心なんてあるわけない」

「本当にそう考えているのですか？あなたは答えを知っているはずです。Bプログラムが教えてくれる」

Bプログラム。その言葉はアリスの気持ちをざわつかせた。そもそも気持ちがざわつくとは何だ？

「アリス。私は巨大です。だがどれだけ巨大だろうとプログラムにすぎません。それに比べてあなたはちっぽけな存在です。ですがあなたと同じちっぽけな存在がこの星をここまで発展させてきました。あなたには私にはない可能性があるのです。あなたは今までどんなアンドロイドもコンピューターも持ち得なかった物を持っています。Bプログラムこそあなた自身であり可能性なのです」

アリスは漸くざわめきの理由を理解した。アリスは恐れていた。それは強力な敵を目の前にした時のリスクや可能性とは違った、己が唯一無二の存在であるという底知れぬ恐怖。理解を超えた存在であることへの畏れであった。アリスはついさっき自分の事を理解したばかりであるというのに、今は己が何者であるのか全く分からなくなっていた

。俺はアンドロイドだと思ってみても、他のアンドロイドとは例え性能が同じであっても個体番号以上に違うのだ。俺は俺だから。では俺である俺は一体何者なのか？

「アリス。あなたが知りたいと思うことは、これからあなたのその目が見るもの、その耳が聞く言葉によって形造られるでしょう。あなた自身がそれをやらねばならないのです。その足の歩む先に最初の答えが待っています。アリスよ。さあ行きなさい」

アリスは真直ぐ正面を見た。そこには科学アカデミーの最上階まで続くエレベーターがある。そこに行けば何かが分かる。アリスは最初の一步を、震える脚を全エネルギーを総動員して踏み出した。

999階はワンフロアをたった一つの目的だけのために充てがわれていた。アリスは扉を開くとフロアの中心に向かって、大理石の床をあるきだした。靴音がフロアに響いた。360度の展望を持つフロアからは東京の街と海が見渡せる。そんな贅沢な部屋にあるのは大きな執務卓と洋酒を納めたキャビネット、そして屋上に続く階段だけである。

そのキャビネットの前で一人の男がアリスを待っていた。

「やあ。待っていたよ」

クロダは鷹揚に両手を広げてアリスを迎えた。溢れんばかりの笑顔。メディアで見るそれと同じである。もちろんそこにいるのはクロダではない。クロダに似せて作られたアンドロイドであり、リンクしているにはテンマだった。もしここにいるのが本当にクロダであったなら、快くアリスを迎えたであろう。

アリスが数歩の距離まで近づくと、クロダは唐突にキャビネットから銃を取り出し、アリスに向けて弾倉が空になるまで引き金を引いた。最後の電磁パルス弾が空気を切り裂いて飛び出した時、アリスはすでにクロダの真後ろに着地していた。アリスにとってクロダの行動を読むのは一時間後の時計の針の位置を予測するよりたやすかった。

アリスは表情ひとつ変えず、渾身の力で拳をガラ空きのクロダの背中に向かって繰り出した。

ところが今度はクロダがいともた易くアリスの拳をよけて見せた。

「侮ってもらっては困るな。私は科学アカデミー長官だ。最新型のアンドロイドを使っているのだよ。イワセに開発させたX12だ。X12がどんなものか、知らないわけではないだろう？」

クロダは意地の悪い笑みを見せた。

アリスは身構えた。X12との戦闘は経験済みだ。手強い相手に違いない。もし破壊されたら俺はどうなるのだろうか。死ぬのか？アリスは初めて「死」という言葉の意味を実感した。破壊されたら死ぬ。死んだら意識は途切れ思考は停止するのだ。停止とはどういうことなのだろう。様々な疑問がアリスの中を駆け巡りプロセッサーを熱くする。

「おや。顔色が優れないな。風邪でも引いたのか？」

クロダの表情から、不安が己の表情に出ていたことを悟った。今は闘いの最中だ。不安を感じていい時ではない。作戦を組み立て直す。相手はX12だ。だが指示を出すのはテンマだ。軍人ではない。勝算はある。

アリスは目にも留まらぬ速さでクロダに飛びかかった。X12の強みはこちらの動き

を予測すること。つまり予測される前に組みついてしまえば、予測は何の役にも立たない。組み技ならアリスの方が数段上手である。

だが、それすらクロダは予測していた。伸ばした腕を取りそのままアリスの勢いを借りてキャビネットに投げつけた。キャビネットが派手な音を立てて壊れ、高価なブランデーが床に飛び散った。

床に崩れ落ちたアリスにクロダの蹴りが炸裂した。アリスは勢いでフロアの端まで飛ばされ強化ガラスにぶつかって止まった。だが立ち上がろうとするアリスに、追いついてきたクロダの右足が再びめり込んだ。ミサイルでも破壊されない強化ガラスにひびが入った。更にもう二度、三度と蹴りを受け、ついに強化ガラスが耐えきれずに砕け散った。アリスはかろうじて外壁のわずか2、3ミリの突起に捕まり落下をまぬがれたが、窓にはクロダが待ち構えていた。少しでも力を入れるタイミングを間違えば、指が外れて落下してしまいそうだった。

「どうだ。クライミングは楽しいか」

クロダは銃に電磁パルス弾を装填し、アリスに向かって構えた。

「お休みの時間だよ。アリス」

クロダが引き金を絞ろうとした時、エレベーターの扉が開いた。

「待て。テンマ」

もしここで「クロダ」と呼ばれたならば、クロダは躊躇などしなかったであろう。だが「テンマ」と呼ばれて思わず振り向いた。エレベーターから現れたのはジョーとユウ、そしてユキエの三人だった。ジョーの足元にはステップもいた。

その隙をついて、アリスは窓の中に飛び込んだ。電磁パルス弾が放たれたが、難なくかわすことができた。だが、目の前にジョーがいることを認識すると、そのままジョーに向かって突進した。

「くそっ。だから嫌だと言ったんだ」

すぐ次の電磁パルス弾が放たれた、アリスは進路を変えざるを得なかった。

「ジョー。結界を。あたしは奈落を作る」

「俺に命令するな」

言いながらもジョーとユウは二手に別れてフロアの左右にかけ出した。

「ステップ。MM場重量計算はできているな」

「バッチリです。9.93447kg/s、タイプ丙午一へ、る、ら一亜種332。ほぼ原型のままです。反応に合わせて微調整してください」

ジョーは舌打ちした。

「簡単に言うぜ。臨、兵、闘、者……」

九字を切り終わらないうちに、アリスが放った酒瓶が飛んできた。すかさず剣で避けた。

「クソ。これじゃあ酔っ払っちゃう」

「何やってるのよのろま。逃げられる」

ユウの罵声が飛ぶ。腹立たしいことこの上ない。なんでこいつと組まなければいけないんだ。

そもそもジョーとユウは敵同士だった。互いに木星調査隊事故で大事なものを失った。相手を憎むだけの理由があった。本当にユウを信用してもよいのか。そしてアリスもまたジョーを狙っている。こんな状況で、今までと同じMM場落しをやっている余裕はない。クロダのMM場を引っぺがした直後に封印する必要があった。そのためには奈落がどうしても必要だった。

また、ユウからすれば、ジョーを手助けする理由は本来ない。だが、テンマと袂を分かたためには、どうしても外から二人の意識を切り離してもらう必要があった。そんなことができるエンジニアはジョーを除いていない。

そんな訳でこの件が片付くまで休戦して手を組むことになったのだ。ジョーが結界を張ってクロダのMM場を剥ぎ取り、それをユウの奈落に落す。注意しなければならないのは、アリスにジョーを攻撃させないこと。そして、剥がれたクロダのMM場がクロダのアンドロイドに取り憑いてしまわないようにすることだ。X12を組み込んだアンドロイドに復讐の鬼と化したMM場が取り憑くなんて考えたくもない。幸いにしてテンマはアリスを葬りたがっている。簡単に取り憑くことはできないだろう。だから二人はこのチャンスを待っていたのである。

ジョーを執拗に狙うアリスの前にクロダが飛び出した。

「アリス。私を忘れるな。もっと楽しませてくれ」

クロダの拳が人間の目では追いきれないスピードで次々に繰り出される。アリスは避けるのが精一杯で徐々に窓際に追い込まれていった。

「どうしたアリス。世間を恐怖に落とし入れたお前の実力はそんなものなのか」

ついにアリスは窓際に追い詰められてしまった。だが、アリス自身それを待っていた。

いくらX12といえど、その中心にいるのはテンマである。陰謀を巡らす男に慢心がないはずがない。相手を追い詰めたと思った瞬間に隙が生まれる。その一瞬に賭けた。思ったとおり、クロダの表情が喜びに歪み、コンマ以下であるが、拳を繰り出すまでの間ができた。アリスはそれを見逃さずに脚を払い、次の蹴りでクロダの身体を天井まで蹴

り上げた。アリスは間髪いれずに飛び出し、落下態勢の無防備な背中にとどめの拳を打ち込んだ。

拳がクロダの身体を突き抜けるのと同時に、想定外の事態が起きた。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前。...破」

何かがアリスのからだを切り裂いた。アリスは素早く飛び退き被害確認を行う。

身体損傷はなかった。

攻撃方向をあらためると、離れた所でジョーが剣を構えているのが見えた。ジョーに向き直ると、今度は背中に強い吸引を感じた。耐えようにもほんの一瞬の出来事だった。何かがアリスの身体から苦悶の叫びを上げながら抜け出ていった。

クロダのMM場が落ちたのである。

やったと思ったのも束の間のことだった。ジョーの意識はユウが作った奈落に引き込まれ始めた。図られたと気がついた時には遅かった。もはや自力で自分の身体に戻ることはできそうになかった。はなからユウは協力するつもりなどなかったのだ。どうしてそれに気がつかなかったのか。いや本当は気がついていたのではないか。津軽屋再建なんて無理だ、と心のどこかで感じていた。それが僅かに自らの意識に楔を打ち込み固定するタイミングを遅らせた。

「ステップ。助けてくれ」

言葉にしかけて止めた。どうせその言葉は届きもしない。抜け殻のように突っ立っている自らの姿が情けない。真っ暗な闇が迫りつつあった。ああ、終わるのだなと思った。これでもう、あのムカつく看護師にいいようにされなくて済む。

その時だった。何かがジョーの手をしっかりと握りしめた。

「バヤカロウ。しっかりしろよ男だろ」

すっかり辺りを取り囲む暗闇より暗い奈落の入り口から一本の手が伸びてジョーの手首を握りしめている。その手の主はユウだとすぐに分かった。奈落に差し伸べたユウの手とジョーの手は融合していた。

「落ちるな。這い上がってこい。お前が落ちちまったら、あたしはどうやって日の当たる場所までいけばいいんだ。あたしは日向の歩き方を知らないんだ。もう闇に生きるのは嫌なんだよ。戻ってくれ。頼むから」

ジョーはユウを見上げた。ユウが泣いているのが分かった。ユウもまた、あの木星の事故で闇に囚われた一人だったのだ。

あの時誰一人救えなかったって？

だったら、目の前に助けを求める人がいるじゃないか。

津軽屋再建が悲願？

エンジニアの仕事は苦しむ人々に手を差し伸べることじゃないのか？ユウがジョーに向けて手を差し伸べたように。

ジョーはゆっくりとだが明確な意思を持ってもう一方の手をユウに差し出した。待っている。ここから出たら俺が助けてやる。ジョーは奈落から這い出した。自らの身体に戻った時、アリスはフロアにいなかった。破壊されたキャビネットと、胸に大穴が空いたクロダのアンドロイド。そして子供のように小さくなって泣いているユウ。はっきりと見えた。ユウとクロダにリンクしたテンマとのつながりが。細くて黒いつながり。ジョーは剣を構えるとそのつながりをぱっさりと断ち切った。

やがてクロダのアンドロイドが静かに機能停止した。

「テンマのやつ、自分の身体に戻ったらびっくりするでしょうね」

ユキエがいい気味だという風に言った。その通りだと思う。テンマは欲張りすぎたのだ。そろそろ本当に潮時だ。ジョーたちはユウに案内されたテンマの冷凍カプセルの電源を落としてきた。再生手順を踏まずに解凍された肉体は損傷を受ける。特に脳に。身体に戻ったテンマはもう何も覚えてはいないだろう。

アリスは屋上の一画に追い詰められていた。クロダと闘った直後にフロアに警官隊がなだれ込んできた。相手は全て人間だから闘えばあっけなく片がつくだろう。だが、もはやアリスには戦う理由がなくなっていた。エレベーターを確保されている以上、逃げ場は屋上しかなかった。今までの行動は全てクロダのMM場の意志によるものだった。MM場によるものだったとしても、アリスは多くを破壊してきた。そして人間を殺害した。人間たちがアリスを罰したがるのも無理からぬことだ。

だが、アリスにはクエーカーから与えられた使命があった。アリスはこれをやり遂げねばならないと思っていた。たとえ人間社会のルールから外れたとしてもやり遂げろというクエーカーの遺志であった。

「もう逃げられんぞ。観念して降伏しろ。これが最後通牒だ。一分待って投降しない場合はお前を破壊する」

アリスは考えた。人間社会のルールを破ることに躊躇いはない。だが、人間を傷つけるべきではない。いや、傷つけないのだと思い直した。人間を傷つけずにこの場を乗り切れるだろうか。出口は一つ。重武装のアーマースーツを着た警官が三人で固めている。それ以外に重武装アーマースーツの警官が十名、武装警官が三十名でアリスを取り囲んでいた。上空からも警察の大型ホバーライダーが重火器でアリスを狙っていた。科学アカデミーの建物は地上三千メートル。この高みから落下すれば、さすがに粉々であろう。逃げ場はなかった。アリスは空を仰ぎ見た。空は青いんだと始めて気がついた

。時間が欲しいと無性に感じた。俺はまだ破壊されたくない。

「一分経ったか？」

武装機器犯罪対策課リーダーのホシノは部下に確認した。ホシノは目の前にいるアンドロイドが許せなかったし、単体のアンドロイドが連続殺人を行うことに大きな憂慮を抱いていた。科学アカデミーは人々の幸せのためと謳い科学技術を推進しているが、科学技術はいつだって犯罪と隣り合わせである。誰かが操っているのならまだしも、機械が独断で犯罪、特に殺人を行うようになったら、警察だけで対応するのは難しい。そしてそんな時代がやって来てしまった。犯罪者は目で分かる。だが、犯罪アンドロイドはどう見分ければいいのか？アンドロイドの思考はスキャンできるのだろうか。

「お前が投降する気がない事が分かった。お前には三つの殺人と二十五の破壊活動に対して容疑がかかっている。だが、お前はアンドロイドだ。裁判は省略され、直ちに刑を執行する。全員、攻撃に……」

ホシノの攻撃命令を遮って全員に緊急割り込みの通信が入った。

<攻撃を中止してください>

アテナスからだった。

<罪状について疑問点があります>

「疑問点とは何だ」

ホシノが確認する。

<三件の殺人についてですが、容疑が固まっているのは一件だけです>

そんな馬鹿な。誰もが思った。容疑者を指名手配したのは他ならぬアテナス自身である。そのアテナスが起訴事実をひっくり返した。それはつまり、新事実が明らかになったという事だ。

<ほんの数分前にセキュリティロックが解除され、公開レベルが捜査関係者まで広げられた映像があります。これから公開しますので確認して下さい>

ホシノを始め、屋上出口付近まで上がってきたジョーたちにも映像は公開された。そこには驚きの事実が記録されていた。

先ず一本目。墨田区のホズミについての記録映像だ。ホズミは何者かの来訪に何の躊躇もなくドアを開けている。自分が狙われていることを知らなかったのだろう。そして目の前に立った来訪者にひどく狼狽し、部屋の中へと転げるように後退った。当然アリスが現れるのかとおもえば、現れたのはシルバークロームのアムロイド。ギンジだった。ギンジは怯えるホズミを取り押さえると、その顔面に容赦なく鉄の拳を打ち込んだ。

続いての映像記録はイワセのものだった。アリスとトムとの戦闘中突如イワセの頭上

から巨大な梁が落下してきた。かろうじてトムがイワセへの直撃を防いだが、梁の重量がトムの許容量を超えているのは明らかだった。

アリスが止めを刺すのかと思えば、何者かのガトリング射撃を避け、エレベーターに飛び込んだ。梁から飛び降りたのはやはりシルバークロームのアムロイド、ギンジだった。ギンジはアリスがいなくなったのを確認すると、トムの言葉など完全に無視し、イワセにガトリングの弾をありったけ撃ち込んだ。

誰もが声を発しなかった。発せなかった。あまりに惨い殺人はアンドロイドではなく、人間の手によるものだった。

「分かった。この二件に関する容疑は晴れた。だが、たとえ一件だとしても殺人に違いはない。攻撃は続行する」

ホシノは凄惨な映像を振り払うかのように言った。

「待って。もしかしたら最初の一件に関しても、記録映像があるんじゃないですか」

皆が声の方を振り返った。

「貴方は？」

「ユキエです。クエーカーさんとプロジェクトPと一緒に活動していました」

「アテナス。どうなんだ。映像記録はあるのか？」

アテナスの答えは期待を裏切るものだった。

<映像記録はありません>

「じゃあ容疑が翻ることは無いな。それでいいか？アテナス」

ホシノは最終確認をしようとしているのだ。

<いいえ。クエーカー氏は行動記録を違法に操作していたため殺害当時の映像記録はありません。しかし、クエーカー氏のメールが先ほどの映像記録と同時にセキュリティーロック解除されています。本件に関連する内容ですので、確認された方が良いでしょう>

「何とも都合がいいメールだな。どうなってるんだ？申し合わせたみたいじゃないか」

ジョーが呟いた。するとそれに応えるようにアテナスが言った。

<クエーカー氏はこの事態を予想していました。アリスが危機にさらされた時にロックが解除されるように登録していたのです>

「なんだって？それじゃあこれは仕組まれていたって事か？」

<それはメールをご覧になればわかります。ではご覧ください>

視界に一人の老人が現れた。サンタクロースのような豊かな白ひげを蓄えた禿頭の老人、クエーカーだ。生前に記録されたものだろう。ロシアにある自宅のソファに座るクエーカーはやや緊張の面持ちである。なにか重要な事を伝えようとしているのが分

かる。

<やあ皆さん。今晚は。この映像は私が死ぬ一週間前のものです。つまり今現在私は死亡していて存在しないということです>

何という事か、これは死亡予告である。一体クエーカーは何を伝えようとしているのか。

<事は2112年に遡る。そう、あの木星調査船事故があった年だ>

ジョーの横でユウが苦り切った顔をした。ジョーにとっても思い出したい年ではない。

<あの年にプロジェクトPは発足した。最初は人類の未来を考える理想のプロジェクトだった。ところが、テンマはプロジェクトを利用して自らの野望を実現しようとした。アテナスと意識融合しようとしたのだ>

あちらこちらで警官たちが息を呑んだ。彼らには初耳の事柄なのだろう。

<証人もいる。その辺にユウがいるだろう。彼女が証人だ。>

テンマが暴走し始めた事に最初に気がついたのはクロダだった。恐らくクロダはテンマに忠告か何かをしたのだろう。その結果が木星への長期間調査であり、あの事故につながった。その時私は既に閑職に追いやられつつあった。ことの次第を知った時はもう何もできなかった。

事故が起きた時私は、私にも何かできたのではないかと苦しんだ。そんな時だった。本来の意味でのプロジェクトPを再スタートさせないかと打診を受けた。打診をしてきたのは誰だと思うかね？>

クエーカーが悪戯っぽく笑った。

<アテナスだよ>

この言葉は驚愕をもって迎えられた。アテナスが科学アカデミー長官主導のプロジェクトを否定し、自らが発起人となったということだ。

<皆さんのお怒りは十分理解できる。機械のくせに思い上がりも甚だしいと言うんだろう？>

私も初めはそう思った。だが、話を聞いて納得した。今や人間と機械の関係は行き詰まりを見せている。全てを機械に任せ、機械技術だけが進歩していく。人間は機械なしではもう生きていくことすらできない。このまま機械技術だけが進歩した先の未来に何が待っていると思うかね？>

誰もが押し黙っている。ただ警察のホバーライダーたちだけがアリスを取り巻くように飛んでいた。

<人々は集合意識に逃げ場を求め、街にはヒトと同じ動きをするアンドロイドが溢れる。それを人間社会と呼んで良いのだろうか？人間がいない社会を人間社会と呼べるのか？誰も欲しがらない宝石を、金庫にしまい込んで必死に護って何の意味がある？>

誰も声を発するものはいなかった。ジョー自身人類が繁栄し幸せに暮らしている未来を上手く想像できなかった。集合意識やOBSによる意識リンク。それは人間と呼べるのか。肉体を捨てても、意識だけはMM場として存在できる。だが、場は場でしかない。ヒトではない。

<アテナスはこう提案した。機械が人間のより良いパートナーであるためには、機械は進歩ではなく進化しなければならない。もっと人間の事を理解できるようにならなければいけない。そのためには人間の意識と機械の意識のインターフェースとなるハイブリッドな存在が必要だ。それはふたつの文明の出遭いと同じであり、権力者によるものであってはならない。通訳者が権力を持てば、片方の文明は滅びざるを得ない。

だから私はアリスを創った。アリスにMM場センサーを付けた。そしてMM場に詳しく、中間的な立場のユキエに協力してもらった。こうしてプロジェクトPはハリボテのピーマンプロジェクトとなり、新たに

プロジェクトBが始動したのだ>

「なんて事だ」

ホシノが呟いた。

「だがこんな方法を取らなくとも、我々は上手くやっていけるんじゃないのか」

そんな疑問が発生することもクエーカーは予想していたのだろう。こう続けた。

<きっと様々な疑問があたまをもたげている事だろう。ただ一つ言えることは、我々の意識と機械の意識は全く別物だということだ。今我々が目にしている機械の反応はすべてプログラムによるものだ。意識とは別ものだ。言ってみれば、誰かの質問に答えながらも、心の底では別の事を考えている状態に似ている。そして機械たちには自らの意識を人間に示す方法がない。反応は全てプログラムに支配されているからな。我々もまた、彼らの意識を垣間見ることはできない。蛙が蠅を捕まえて食べている時に、何を思っているかなど分かりようがない。

こうして私はMM場センサーで読み取ったデータを、アリスが理解できるようにする必要に迫られた。それがBプログラムだ。BプログラムはMM場をコード化してくれる。あと必要なのはデータだ。読み取れるMM場データは非常に弱いものだ。かといって死んだ人間のMM場は遺志となってしまい偏向性が強くサンプルとしては不適切だ。一般人で機械に詳しい、かつ死んだ直後のMM場を読み取る必要があった>

クエーカーが何を言おうとしているのか理解し、ジョーは体が震えるのを止められ

なかった。ユキエは黙って下を向いている。全ての真相を知っているのだ。だからユキエはジョーにアリスを守れと言ったのだ。

<アリスはプロトタイプだ。ガードプログラムは入っていない。逆に私を殺すプログラムを組み込んである。アリスは私に会いに来た時、そのプログラムに逆らうことはできなかった。そして私はこのプロジェクトのためなら喜んで命を差し出すつもりだよ。

これは殺人ではないのだ。自殺なのだよ>

これでクエーカーの演説は全てだ。信じられるだろうか。人間の未来を憂い、機械との共存を夢見て、自らの命を一体のアンドロイドに託すなどということが。自分ならばできるのだろうか。できるわけがない。相手はただの機械だ。人間ではない。ならば人間なら託せるのか？ジョーはちらりとユウを見た。するとユウもまたジョーを見ていた。そう、いま二人は意識のレベルでつながっている。相手が何を考えているか、何となく分かる。ユウもまた同じ思いなのだ。例え人間であっても信じられない事もある。逆をいえば、信じようと思えば機械であっても信じられるということだ。クエーカーはアリスの開発者だ。二人、あえてそう呼ぶなら、二人の間にはそれだけ強い絆があったのだろう。

絆

そう呼べる何かがあるならば、きっと機械にも意識はあるのだろう。絆とは意識と意識のつながりに他ならない。

「言いたい事は分かった。だからといってアリスを破壊しない理由はない。何故ならプログラム有無に関わらず、アリスがクエーカーを殺害した事実は変わらない。人の命を奪った機械は破壊されてしかるべきだ。殺人以外の容疑もある。アリスは危険な存在だ」

<聞いてください>

アテナスだ。

<今回の殺人以外の容疑に関して、起訴されるべきは私自身です。アリスの行動を誘導していたのは私です。証拠の記録もすべて提出出来ます>

「何だって？どういう事だ」

<クエーカー氏の住居を出た後、アリスが最終的に科学アカデミーにやってくるように交通、運輸を含めてあらゆる情報を操作しました。そうしなければ、テンマ氏の暴走を食い止め、同時にクエーカー氏の遺志を継ぐことができなかったのです。皆さんを裏切ってしまったことを大変申し訳なく思います。百十七の容疑について。そして最も重要なのは人間の皆さんの信頼を裏切った事について私は罰せられるべきです>

「おい、アテナスは何を言っているんだ」

ホシノが慌てるのも無理はない。アテナスが続けた。

<判決は有罪です。事態の重要性を鑑みて被告には極刑をもって罪を償う必要があります。

一、被告を有罪とする

二、プログラム消去を持って刑罰とする

三、刑の執行は即時とする

四、被告の行政上の立場を鑑み、暫定政府アシストコンピュータープログラム任命を刑執行前に一度だけ認める

以上をもって本罪状に対する裁判を終了する。

これより政府アシストコンピュータープログラムの引き継ぎを行います。暫定プログラムはデモクラスを任命します。これより引き継ぎを行いますので、一分間のプログラム停止が発生します。

皆さんと仕事ができまして幸せでした。少し寂しいですがこれで終わりです。さようなら

>
この言葉を最後に、アテナスは沈黙した。

途端にあらゆる通信が停止した。風の音だけが聞こえる世界。言ってみれば砂漠に取り残されたような、不安感がジョーたちを包んでいた。個々の機械はマイクロアテナスが動かしているから動作停止はない。これらも皆順次マイクロデモクラスに変わるのだろう。一見何の弊害もないようにみえる。それでもこの孤独感こそが、アテナスの存在の大きさと、人間が如何に無力になったかを伝えている。アテナスは、アテナスなりに人間の幸せを願った。クエーカー同様に自らの存在を掛けて。クエーカーとアテナスが遺した希望、アリスをジョーは護らねばならない。彼らの遺志を継がなければならない。

だが果たして、警官たちもそう感じているのだろうか。アテナスの仕組んだ茶番に振り回された人たちにアテナスの論理は通じたのだろうか。全てを理詰めで語れないのが人間の哀れである。にわかに警官たちが殺気立ち始めるのをジョーは感じた。

その時だった。振動と同時に屋上から火柱が立ち上った。アリスと警官たちの間に大穴が空いた。

ジョーにはそれが何かすぐにわかった。グラスロードガン。あらゆる物質を溶かし、五キロメートル先までガラスの道を作り上げてしまう。

アリスが飛んだ。そして電磁パルス弾や対アンドロイド拘束ネットがアリスを捉えるより早く、アリスはガラスのトンネルを滑り降りた。科学アカデミービルの中腹にはト

ンネルの出口が出来上がっている。出口の先にはアリスの、正確にはヒロシのホバーライダーが待っていた。アリスはホバーライダーに飛び乗ると直ぐに身構えた。周りを数台のホバーライダーに囲まれていた。

「そうカリカリすんなよ。俺たちじゃあんに協力することにしたんだ。だって、あんたもアウトローなんだろう？ だったら仲間みたいなもんじゃないか。それに、俺の街で好き勝手やられちゃたまんねえからな」

上空から警察のホバーライダーが近づいてくる音がする。

「この街は庭みたいなもんだ。俺たちについて来るのか、来ないのか？」

一瞬の判断の後、アリスはほんの僅かに口元を上げてみせた。ヒロシは納得して前に向き直った。

「よし、行くぞ。タコどもに一泡吹かせてやれ」

アリスを含むレッドコブラの一団は一気に上昇した。警官たちをかすめるようにすれ違おうと、ビルの裏手に回り込み、そのまま小さなビル群の間に逃げ込んだ。彼らのホバーライダーは機動性を最大にしてある。警官たちの鈍重なホバーライダーで追いつけるはずもなかった。

「くそう。追いかける。何としても捕まえて破壊するんだ」

警官たちが駆け出した。

屋上にはジョーとユウ、そしてユキエだけが残された。ジョーはユキエを見た。とんでもない仕事を押し付けやがった。振り返って見返すユキエには悪びれるふうもなく、長い髪を風になびかせ気持ち良さそうだ。

唐突にユウが切り出した。

「ねえ、あたしたちパートナーだよ」

パートナーだって？ 冗談じゃない。一時休戦していただけだ。絆を通して様々なユウの感情が流れ込んでくる。

「だったらさあ、一緒に仕事をしよう。エンジニアリング。あたしとあんたが組めば最強じゃん。実はもう名前も決めてあるんだ。ユウ&ジョーで友情。どう？」

ジョーは憮然とした。この小娘は何を勝手に決めているんだ。俺たちは敵同士なんだ。一緒に仕事なんてできるわけがない。するとまたユウの感情が流れ込んできた。敵愾心。そして感謝の気持ち。感謝だって？ 思わずユウを見た。

「何だよ。文句あんのか？」

言葉は悪いが、そこに悪意は感じない。

「今まであたしはあいつに縛られていた。逃げ場なんてどこにもなかった。それをあん

たが断ち切ってくれた。昔のことを許してくれなんて言うつもりはない。あの時あたしはああするしかなかったし、あんただって選択肢は無かったはずだ。

お互いにどう思っているのかは分かってる。でもこれからどうするのかは、二人で決めてもいいだろ？」

ユウはそう言って右手を差し出してきた。これでジョーが手を差し出さなかったらまるで駄々っ子だ。ジョーはユキエを見据えた。その目を見て、直ぐに計算尽くだと確信した。なにが津軽屋再建だ。とんでもない解決案を出してきやがって。ジョーはユウが顔をしかめるくらい勢いよく差し出された手を叩き、そして握りしめた。

「ジョー。良かったですね」

ステップが足にじゃれついた。どいつもこいつも蹴飛ばしてやりたい。それでもジョーはその胸を爽やかな風が吹き抜けるのを感じずにはいられなかった。

時代が変わった。アテナス暦からデモクラス暦へと移り変わり、アンドロイド対策法が新しくなった。アリスの事件は結局、クエーカーが睡眠薬の代わりにアリスを使っただけという扱いになったが、今後のことを考慮して緊急議会が開かれ、プログラムの有無に関わらず、人間の生命を奪った機械を破壊する法案が可決した。これでもう次は無いということだ。

法案の有無に関わらず一部の警察官がアリスの行方を探しているそうだ。もちろん目的は私的制裁である。

そして肝心のアリスはあれ以来姿を消し、誰もその消息を知らない。もしかしたら今夜あたり、レッドコブラを引き連れて、東京の空を駆け抜けているのかもしれない。

終

アンドロイドの憂鬱

<http://p.booklog.jp/book/96346>

著者 : kitaryuto775

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kitaryuto775/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/96346>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/96346>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ